

遺構検出は第Ⅲ層上面で行い、弥生時代から中・近世の竪穴式住居址1棟、掘立柱建物址5棟、土坑5基、溝8条のほか柱穴や小穴を多数検出した。既に、本調査については『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』(松山市教育委員会1991年)に概要を報告しているが、整理の結果、遺構認定及び遺構数が異なっており、取り扱いに注意していただきたい。

なお、調査にあたっては調査地に4mのグリッドを設け、南から北にA・B～H、西から東に1・2～6とし、呼称はA 1・A 2…H 6区とした(第128図)。調査はB～H区の範囲で行い、A区は調査地への進入路と現場事務所及び堆土置場とした(第127図)。



第127図 調査地位置図 (S = 1 : 2,000)



第128図 遺構配置図

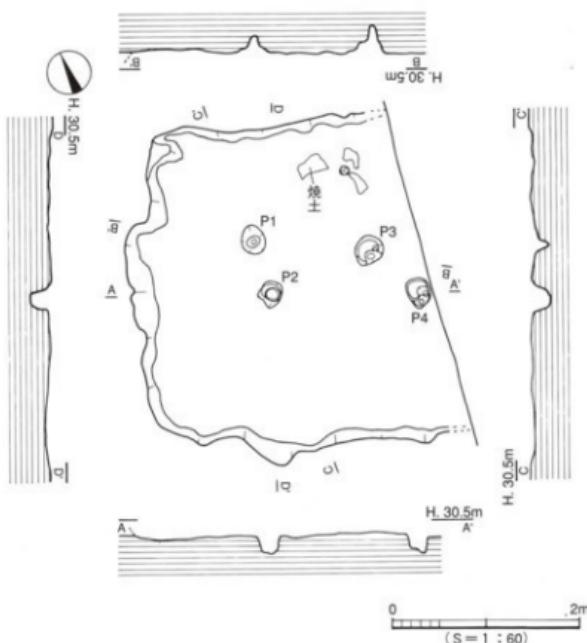
3. 遺構と遺物 (第128図)

本調査で検出した遺構は、時期及び性格が明確に報告できるものは少ない。これは、調査地が河川流域の氾濫原に立地することに起因するものである。遺構は竪穴式住居址1棟 (S B 1)、掘立柱建物5棟 (掘立1~5)、土坑5基 (S K 1・2・4・5・6)、横列5条 (S A 1~5)、溝状8条 (S D 1~8)、柱穴及び小穴190基、倒木痕などを検出した。

(1) 竪穴式住居址

S B 1 (第129図)

S B 1はE 5区にある。平面形態は長方形で2/3を確認した。規模は3.35×3.20m、壁高5cmを測る。床面中央には4基の柱穴を検出した。P 2とP 4間は1.64mを測り、P 1



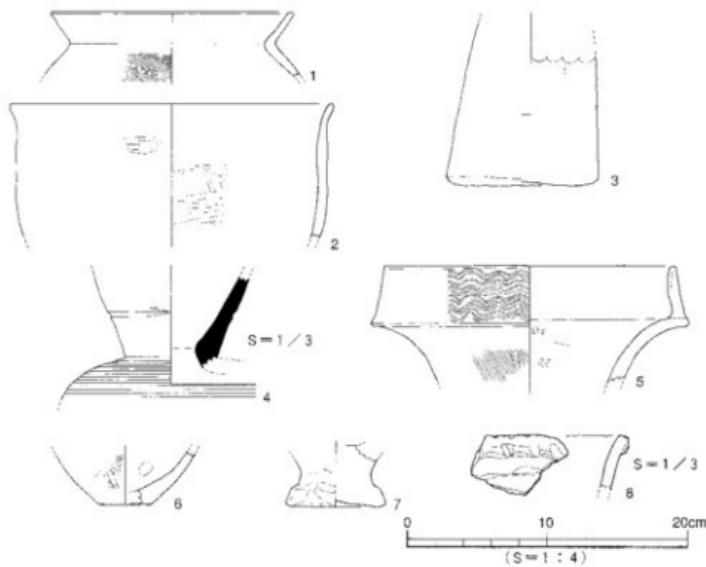
第129図 SB1測量図

とP3間は1.3mを測る。南北(P1・2、P3・4)の柱間は0.5mである。柱穴の直径と深さより、主柱穴はP2・4と考える。P1・3については性格判断が難しい。北壁沿いの中央部では焼土が検出され、焼土内からは図示する円筒形の土製品(3)が出土した。住居址からの出土物には円筒形の土製品のほか7世紀の平瓶と縄文・弥生土器が出土している。

出土遺物 (第130図、図版61)

1・2は土削器である。1は臺で内傾する口縁部をもつ。2はコシキで、口縁部は外反する。3は器種不明で、中実で円筒形を呈する。4は須恵器の平瓶である。5~7は弥生後期上器であり、5は複合口縁壺、6は壺底部、7は支脚である。8は縄文晩期の深鉢である。口縁部に接して凸帯をつける。

時期：出土土器は破片であり、厳密な時期比定には有効とはいえないが、6~7世紀の住居址と考えておく。

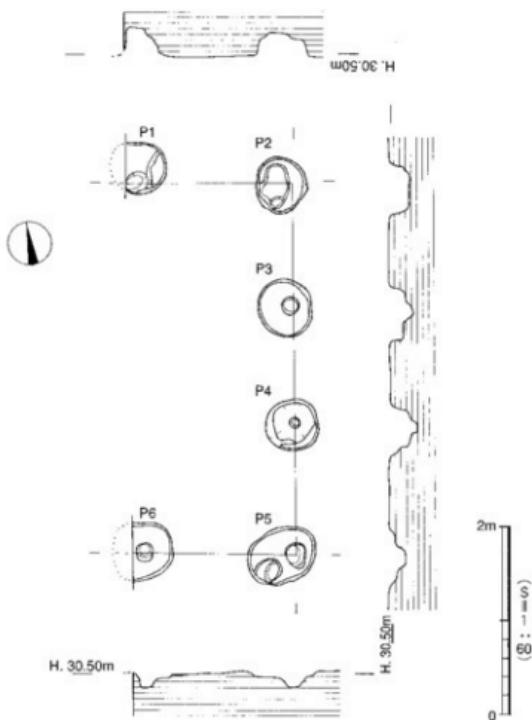


第130図 SB1出土遺物実測図

(2) 掘立柱建物

掘立柱建物 1 (第131図)

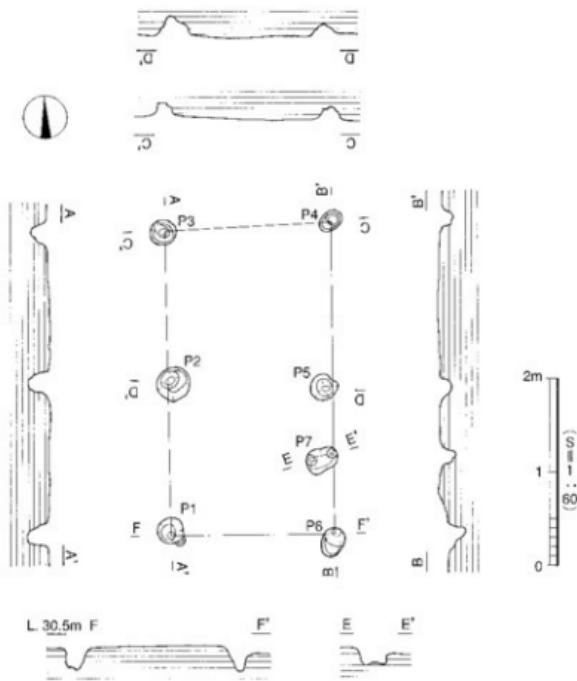
掘立1は調査区西端のD1区からE1区にある。2間以上×3間の規模をもつ掘立柱建物である。梁間1.6m、桁行3.8m(1.2m・1.2m・1.4m)を測る。柱掘り方は径60cmの円形で、上面より20cm下に段をもつものがある。柱底径は10cmから20cmで、深さは10cm前後と浅い。柱穴埋土は茶褐色土で、弥生時代後期から中世13世紀代の土器の細片が出士している。



第131図 掘立1測量図

掘立柱建物 2 (第132図)

掘立2はF 5区からF 6区にある。梁間1間、桁行2間の南北棟である。梁間は1.8m、桁行は東西において異なり東桁は3.3m (1.8m・1.5m)、西桁は3.25m (1.6m・1.65m)である。東桁列には更に1基の柱穴がみられるが、性格は不明で別遺構も考えられる。柱穴の掘り方は梢円と円形の二形態があり、規模は最大のP 2 (径35cm)を除いては、30cm以内に収まる。深さは10~20cmと一定せず、埋土は黒褐色土1層である。遺物の出土はない。



第132図 掘立2測量図

掘立柱建物 3 (第133図)

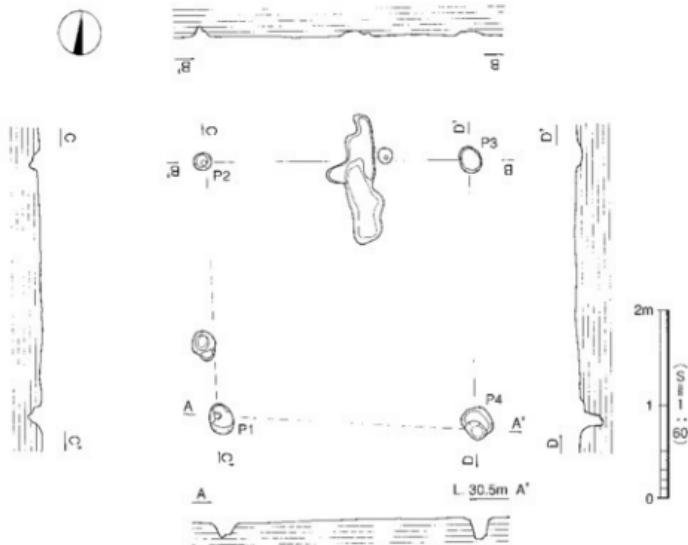
掘立3はF4区にある。柱間は北面、東面、南面が均等の2.9m、西面が若干狭く2.6mを測る。柱穴は円形と楕円形があり、直径は18~30cm、深さは10~25cmである。図にみるように、北面には低い段差をもった不整形の掘込みが検出されたが、建物に伴うかは定かでない。遺物の出土はない。

掘立柱建物 4 (第134図)

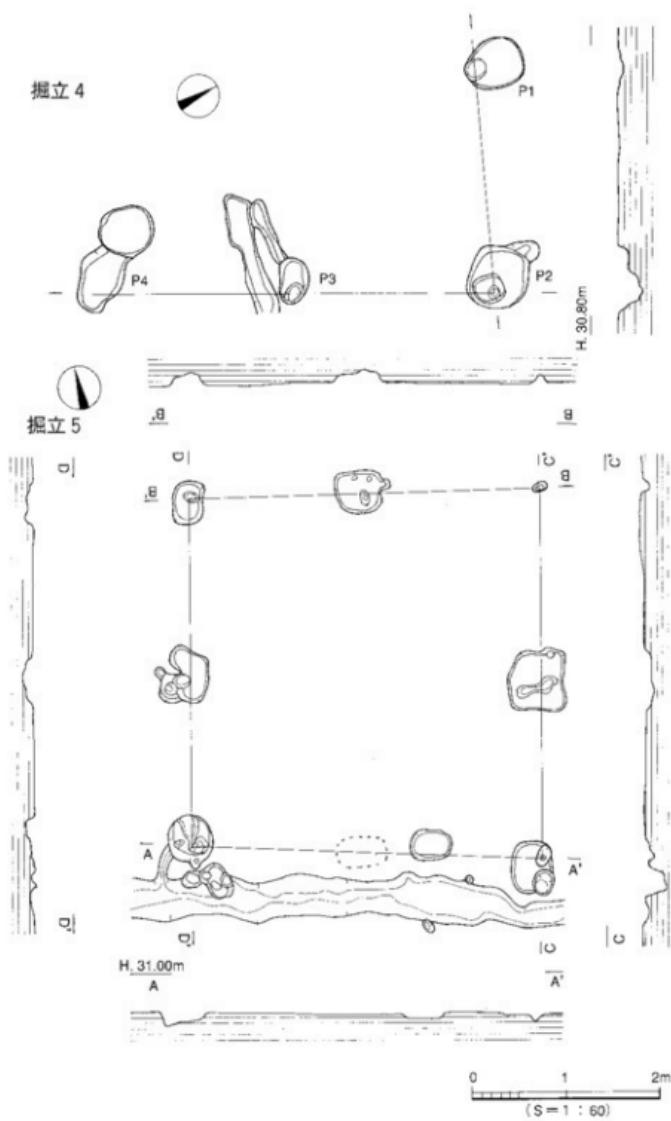
掘立4はE1区~F1区にある。規模は、東西は1間で2.40m、南北は2間で4.3m(2.2m・2.1m)となる。掘り方は円形と不整形があり、径50cmを測る。円形掘込みの深さは25cmである。柱痕は径25cmである。遺物の出土はない。

掘立柱建物 5 (第134図)

掘立5はC1・2区~D1・2区にある。東西は2間で3.7m(1.9m・1.8m)、南北は2間で3.7m(1.9m・1.8m)である。柱穴は円形~隅丸方形をし、規模は長軸は45~60cm、短軸は30~60cmである。遺物の出土はない。



第133図 掘立3測量図



第134図 挖立4・5測量図

(3) 土 坑

SK1 (第135図)

SK1はB3区にある。平面形態は円形で、南北0.95m、東西0.90m、深さ3cmである。人工的掘り込みか、自然によるものか明確に判断されない。埋土は黄褐色土である。遺物の出土はない。

SK2 (第135図)

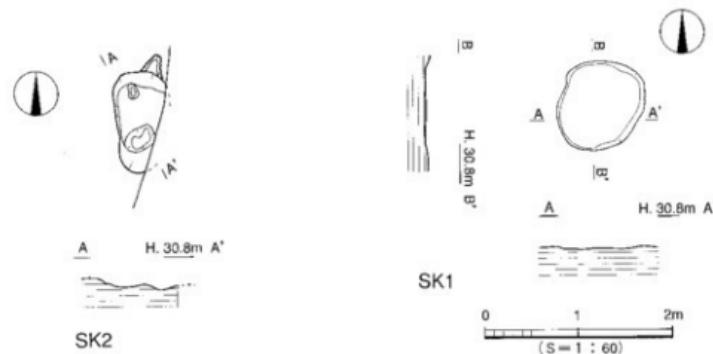
SK2はC5区にある。平面形態は橢円形を呈し、南北1.05m、東西0.5m、深さ5cmを測る。遺物の出土はない。

SK4 (第136図)

SK4はD4区にある。平面形態は長方形で、東西3.0m、南北0.65m、深さ10cmを測る。東端が広く、西端に向か狭くなる(差10cm)。横断面は舟底状を呈する。基底部には、三地点で疊が出土している。埋土は北側基底部に限り灰褐色土の堆積がみられ、他の部分には黒色土が埋土となる。疊以外の出土遺物はない。

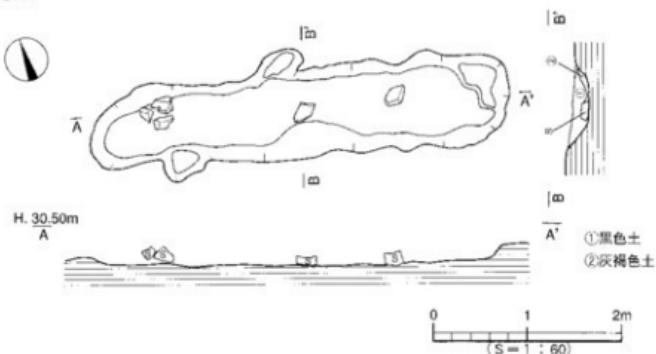
SK5 (第136図)

SK5はD3区にある。平面形態は不整な橢円形を呈し、規模は長軸1.75m、短軸1.1mを測る。縦断面形はL字状を呈す。北壁部は僅かに残存するにとどまる。床面は凹凸で北東に向か下り勾配を呈し、深さ5cmを測る。遺物は北壁から遺構外に出土がおよんでおり、SK5に伴うものでないと判断した(P210図3参照)。

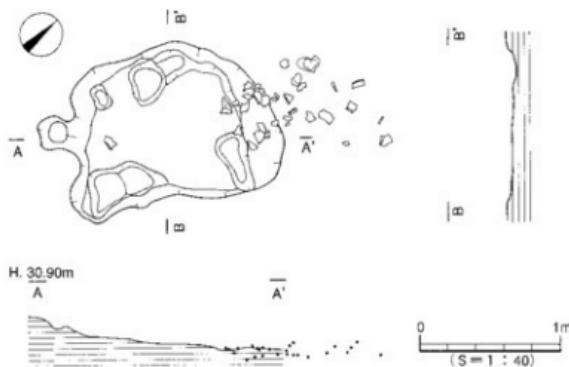


第135図 SK1・2測量図

SK4



SK5



第136図 SK4・5測量図

SK6 (第128図)

SK6はG5区にある。平面形態は橍円形で、長軸1.2m、短軸0.7m、深さ4cmを測る。埋土は黒褐色である。遺物の出土はない。

(4) 溝

S D 1 (第128図)

S D 1はB 0～2区にある。S A 1に切られる。東西方向の溝である。検出長8.0m、幅30cm、深さ4cmを測る。東部から南西部には、氾濫をうけた様相がみられ、基底面は南へ緩傾斜している。出土遺物はない。

S D 2 (第128図)

S D 2はC 0～2区、B 3～4区にある。掘立5とS A 1に切られる。検出長16.5m、幅50cm、深さ6cmを測る。出土遺物はない。

S D 3 (第128図)

S D 3はC 5区にある。東部が未確認で、土坑ともみれるものである。検出長1.5m、幅0.5～1.0m、深さ5cmを測る。基底部には小穴3基が検出されている。小穴の深さは7～10cmである。出土遺物はない。

S D 4 (第137図)

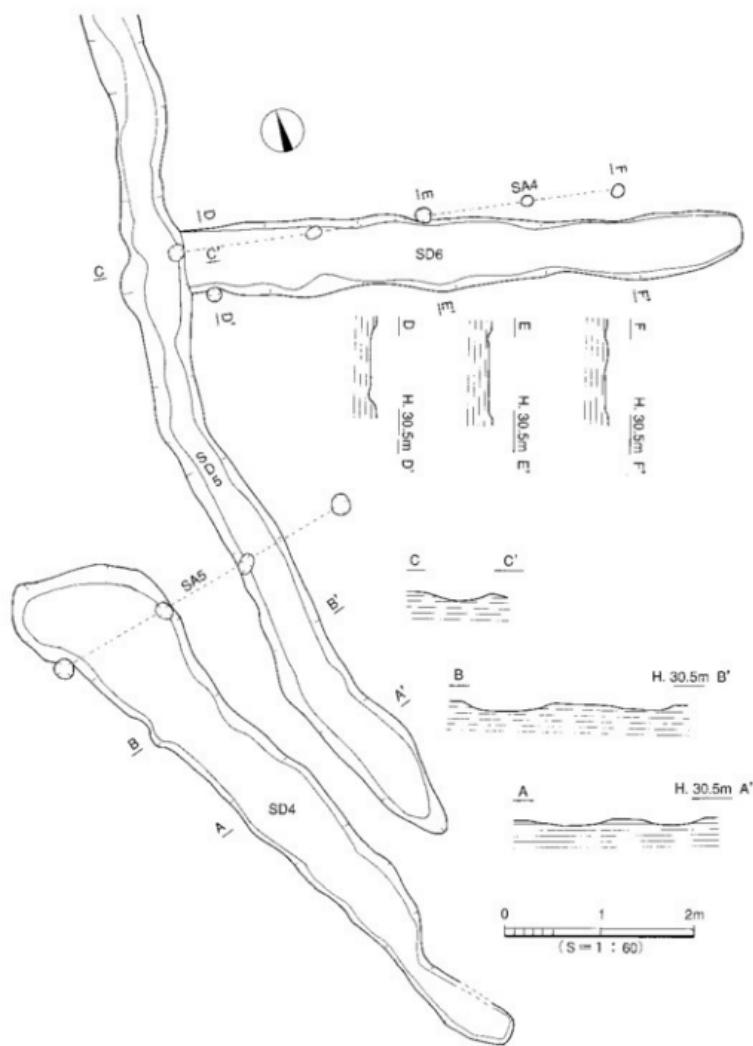
S D 4はE 3～F 3区にあり、S A 5に切られる。検出長7.0m、幅0.4～1.1m(北部が広い)、深さ5cmを測る。出土遺物はない。

S D 5 (第137図)

S D 5はF 3～H 3区にあり、S D 6に接し、S A 5に切られる。検出長9.7m、幅60cm、深さ8cmを測る。出土遺物はない。

S D 6 (第137図)

S D 6はG 3～5区にある。検出長5.9m、幅65cm、深さ5cmを測る。S D 5に接する部分では、S D 6の基底部はS D 5の基底よりわずかに高くなっている。出土遺物はない。



第137図 SD4・5・6 測量図

(5) 檻列

檻列は5基を検出した。いずれも出土遺物はない。(第138図)

S A 1 : B 1 ~ D 1 にあり南北を指向する単列の柱穴群である。S D 1 と S D 2 を切る。檻列は方形掘りこみ(一辺50cm)4基と楕円掘り込み(径30cm)2基の計6基で構成される。全長8.5mを測る。出土遺物はない。

S A 2 : F 5 区~G 5 区にあり、柱穴7基からなる。全長5.5mを測る。

S A 3 : G 5 区にあり、柱穴3基からなる。全長2.0mを測る。

S A 4 : G 4 区からG 3 区にある。S D 5・6 を切る。柱穴5基からなり、全長4.8mを測る。

S A 5 : F 3 区にある。S D 4・5 を切る。柱穴4基からなり、全長3.7mを測る。

(6) その他の遺構

倒木痕2基と自然流水により凹地とみられるものが3基ある。

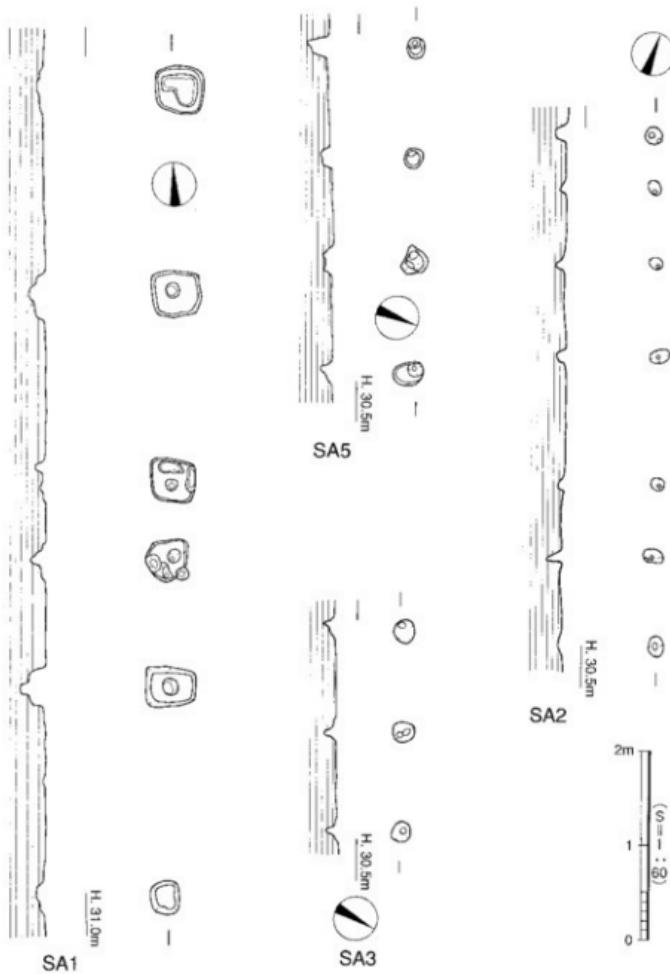
倒木痕 S X 4 (第128図)

S X 4 はC 4 区にある。平面形態は馬蹄形を呈する。埋土は大別すると3層ある。第1層は北から南へ黒色土、暗褐色土、赤褐色土と暗褐色土の混合土、灰褐色土の計4つの土壤が混合し厚さ8cmを測る。第2層は北側に灰褐色土、南側に黒色土の分離堆積がみられる。第3層は褐色土である。出土遺物はない。

倒木痕 S X 5 (第128図)

S X 5 はE 1・2 区~F 1・2 区にある。平面形態は不整形で、北東5.2m、南西3.7mを測る。床面は凹凸があり、柱穴12基が検出されている。出土遺物はない。

S X 1~3 : 自然の流水による凹地と考える。いずれも南に低くなる。



第138図 SA測量図

(7) 包含層出土遺物

1) 縄文時代 (第139~141図、図版61・62)

D 3 区出土品：9~24は『年報Ⅲ』でSK5として掲載されていた一群の土器である。SK5で解説したが、土器はSK5以外で多く出土しており、整理作業においてSK5に伴うものでないと判断したものである。ただし、グリットD 3区に集中して出土しており、同時性は高い遺物群と思われる。よって、ここでは、D 3区出土品として資料提示する。

9~14は深鉢である。9~13は口縁部が外反し、口縁端部からやや下がる位置に刻目突帯をもつものである。14は胴部に突帯をもついわゆる2条突帯の深鉢である。15~20は浅鉢である。15~17は口縁部が外反するもので、15・16は波状口縁となる。15~17は口縁内面に沈一凹線をもつ。18~20は胴上半部が内傾するものである。19には「X」字状の小さい突帯をもつ。20は大型品で、口縁内面と肩部に沈線をもつ。21は中型壺である。短く外反する口縁部をもつ。22~24は石製品である。22・23は敲打具、24は石皿である。

25~31はD 3区周辺より出土した土器である。25~30は口縁部が外反し、口縁端部からやや下がる位置に刻目突帯をもつものである。31は2条突帯の深鉢片である。

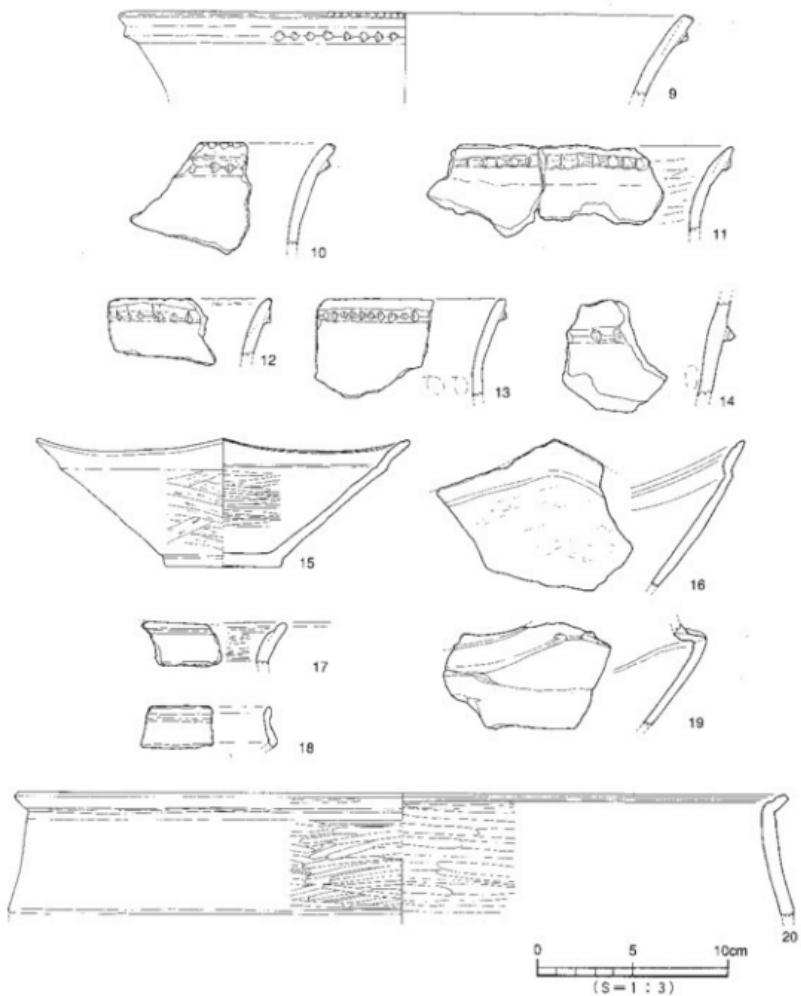
2) 弥生時代 (第141図、図版63)

32は複合口縁壺で、櫛描波状文を2段もつ。33は器台の受部で、端面に竹管文をもつ。弥生後期後半。34は甕転用のコシキである。弥生中期後半。

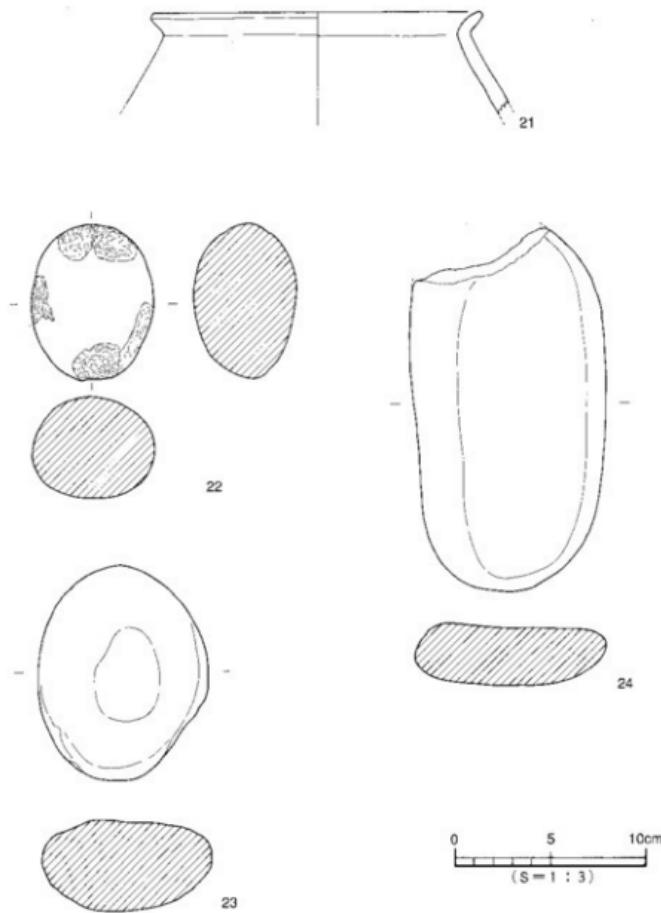
3) 古墳時代～古代 (第141~143図、図版63)

①古墳時代の土師器 35は甕で、口縁部は内傾し面をもつ。36・37は高坏脚部である。36は充填技法がみられる。38~40はコシキの把手部である。38~41は5~6世紀。41は紡錘車で、焼成前の貫通孔をもつ。42・43は高坏である。柱部は中実となる。42・43は7世紀代。

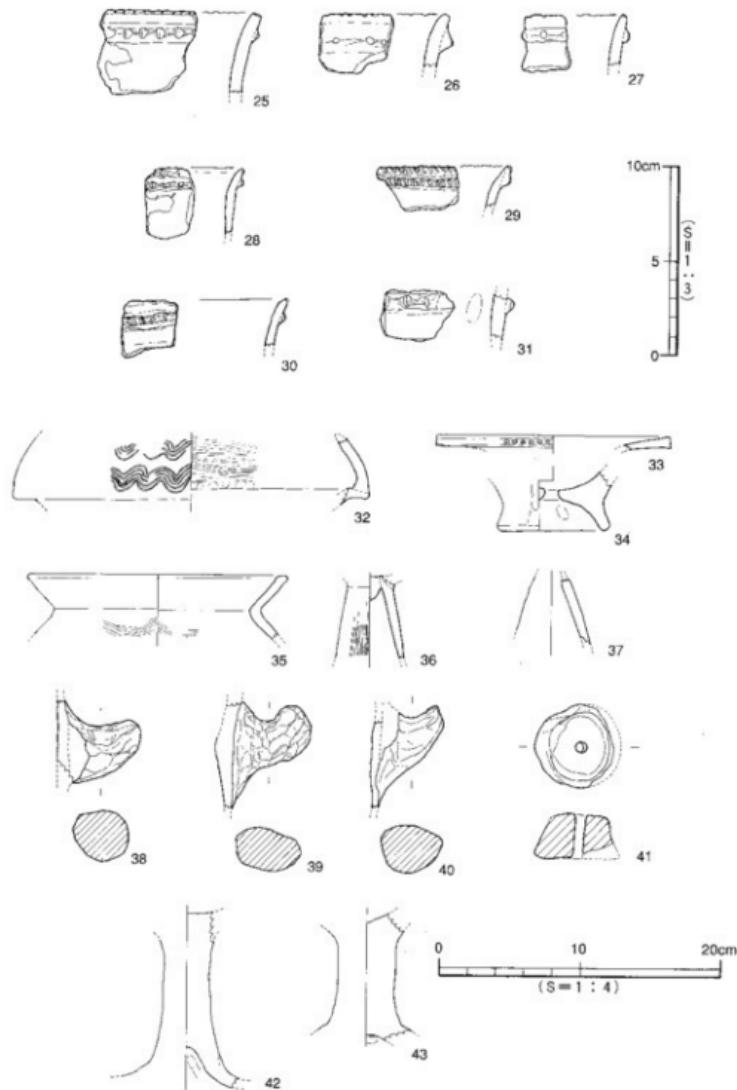
②古墳時代の須恵器 44は坏身である。たちあがりは短く内傾し、罐部は尖り気味。受部は上方に伸び、受部端は内側にわずかに屈曲する。体・底部はやや丸味をもつ。底部外面はヘラ切りの後ナデているが、一部未調整である。45は甕である。口頭部は外反し、端部を下方に肥厚させ丸くおさめる。口頭部外面はハケの後回転ナデ調整を施す。内面は自然軸付着のため不明瞭ではあるが、回転ナデ調整を施している。44・45は古墳時代で、6世紀末頃に比定されるだろう。



第139図 包含層出土遺物実測図(1)



第140図 包含層出土遺物実測図(2)



第141図 包含層出土遺物実測図(3)

③古代の須恵器 46～53は坏蓋である。46～50は宝珠様、あるいは擬宝珠様のつまみである。51のつまみは扁平で、中央の凸形がつぶれた形をしている。52は扁平で、中央がわずかに凸形をなす。46～52は全てつまみの部分に回転ナデ調整を施している。53は体部から天井部にかけて笠形を呈するが、天井部の大半は欠損する。口縁端部は下方へ短く屈曲する。天井部外面には回転ヘラ削り、内面はナデ調整、その他は内外面とも回転ナデ調整を施す。54～56は坏身である。54・56は底端部に、55は底端部よりやや内側にハの字形の高台を貼付する。54の体部・口縁部は外傾し、口縁部はわずかに外反する。55の高台の接地面はわずかに凹面をなす。57は壺である。底端部にハの字形の高台を貼付する。高台の接地面はわずかに凹面をなす。体部外面は回転ヘラ削り調整を施す。内面は回転ナデ調整だが、指頭痕が残る。58は硯である。円面硯である。脚部の大半が欠損する。外堤部は低く外傾する。陥部には工具痕が残る。59は瓶である。底部と口頭部を欠損している。体部は卵形をし、肩部はなだらかに張る。内外面ともにナデ調整されているが、外面には工具痕が残る。60・61は器種不明である。60は底端部に高台を貼付し、体部はほぼ直立する。61の器壁は厚い。体部は外傾し、外面に沈線が1条巡る。残存部分の下端は接合部が剥離している。内外面ともに自然釉が付着する。62・63は壺である。62の口頭部は外反し、端部はわずかに下方へ肥厚する。内外面とも回転ナデ調整を施すが、残存部の下端にわずかに叩きが認められる。63の口頭部は外反し、端部は方形を呈する。内外面とも回転ナデ調整を施す。46～63は古代以降のものであり、ほぼ8世紀代でおさまるだろう。

④古代の土師器 64は壺である。口頭部は外反し、端部は沈線状に凹む。口頭部外面にはハケの後ヨコナデ調整を、内面にはヨコナデ調整を施す。

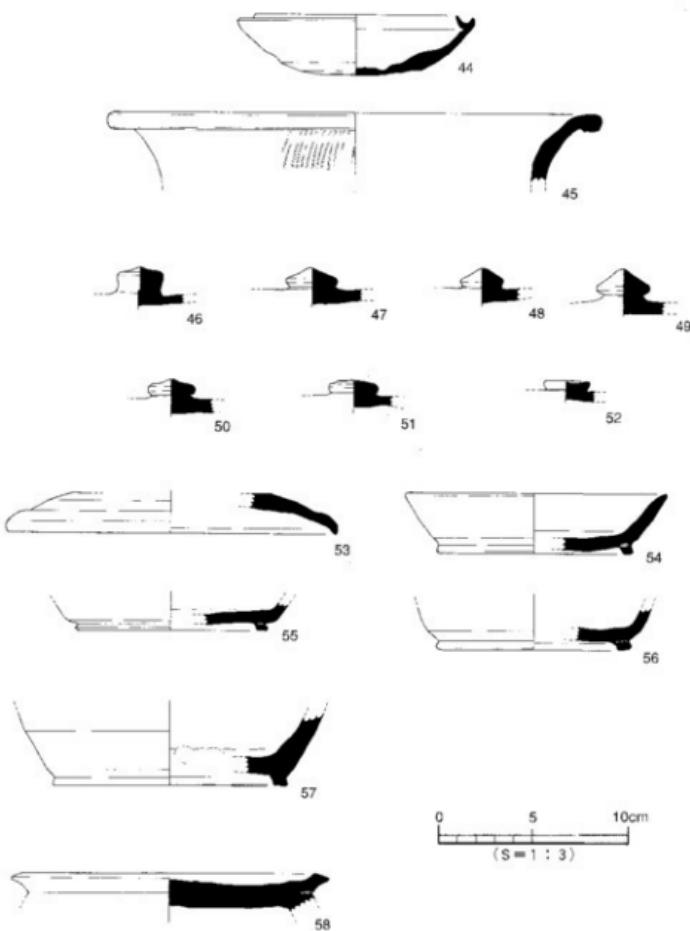
4) 古代末～中・近世（第144・145図、図版64）

65は白色系土師器の底部である。66・67は土師器で、66は坏底部10世紀後半～11世紀、67は内黒塗の底部11世紀である。68は須恵器の片口鉢である。11世紀。69～76は13世紀の土器である。69は和泉型瓦器塊、70・71は坏、72は白磁、73・74は龍泉窯系の碗、75・76は東播系のこね鉢である。77・78は14世紀の小皿である。79～81は15世紀の擂鉢である。82は16世紀の擂鉢、83は時期比定できない擂鉢である。84は盃で15～16世紀。

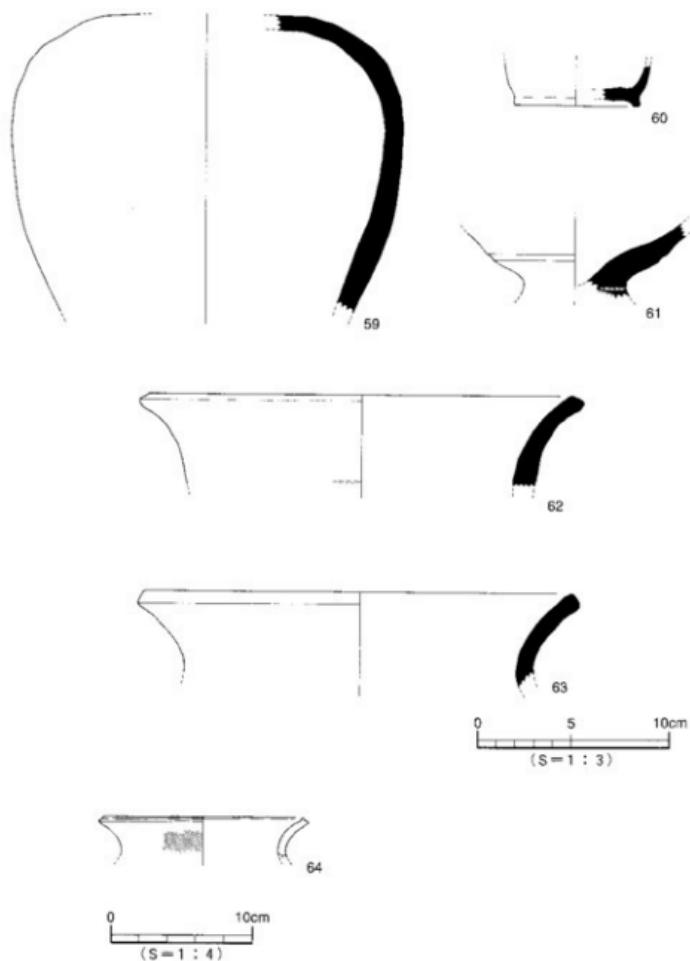
5) 石製品（第146・147図、図版65・66）

85はサヌカイト製の石礫である。86は石庖丁の製品で、両側に抉りをもつ。87はD4区で出土しており、D3区の縄文後期資料に関係するものであろう。88は台石、89・90は用途不明品で、縄文晚期～弥生時代のものであろう。91～94は砥石である。時期不定。

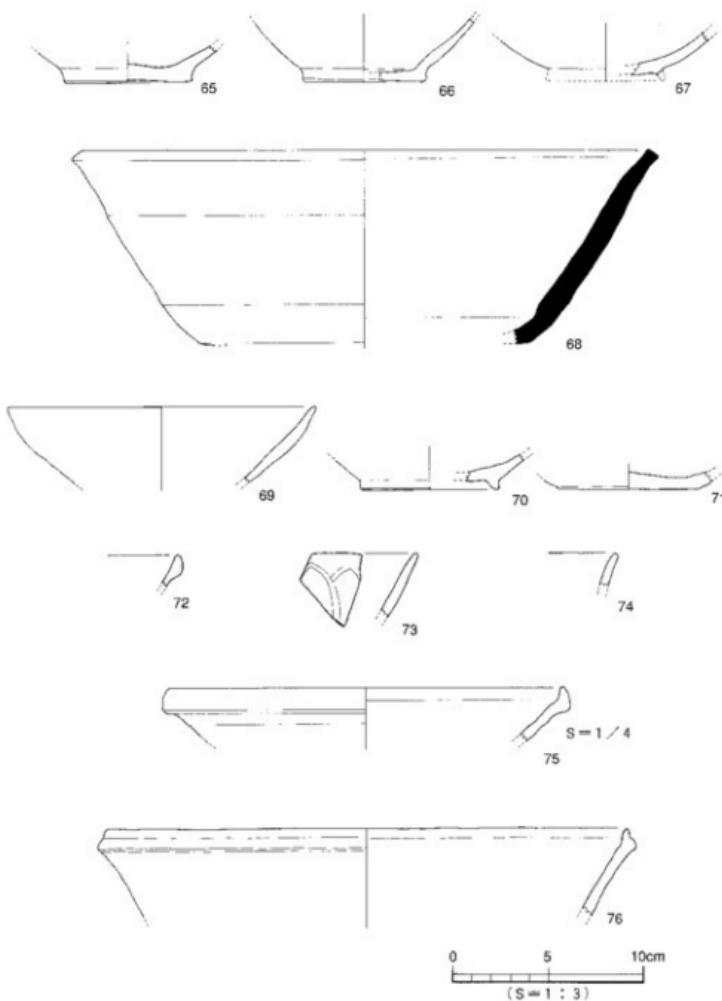
なお、整理の不備で遺物が後日に発見されたものがあり、図版66にて掲載する。



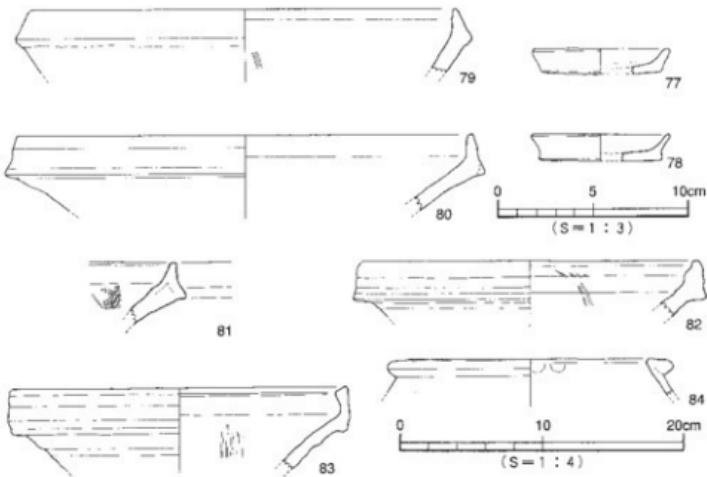
第142図 包含層出土遺物実測図(4)



第143図 包含層出土遺物実測図(5)



第144図 包含層出土遺物実測図(6)



第145図 包含層出土遺物実測図(7)

4. 小 結

(1) 層 位

遺跡は、いわゆる来往台地の南西端部にあり、地形が南へと落ちる地点である。よって河川の氾濫原地帯に含まれる土地である。表土と地山の間には、不明瞭ながら縄文晚期、弥生中～後期、古墳以降近世までの遺物を含む土壤がある。細かく検討を加えれば、縄文晚期と古墳以降の土壤は区分ができる可能性がある。

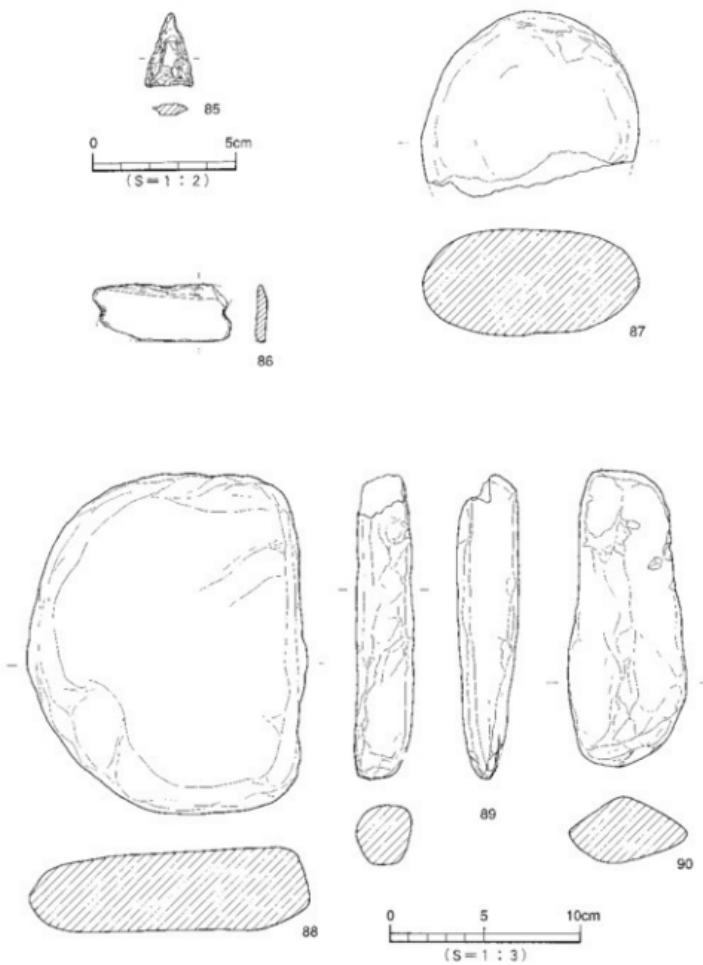
(2) 遺 構

検出遺構はいずれも時期比定は難しいが調査地から出土した遺物からすると遺構の主体は7世紀と11～15世紀であることが推察される。

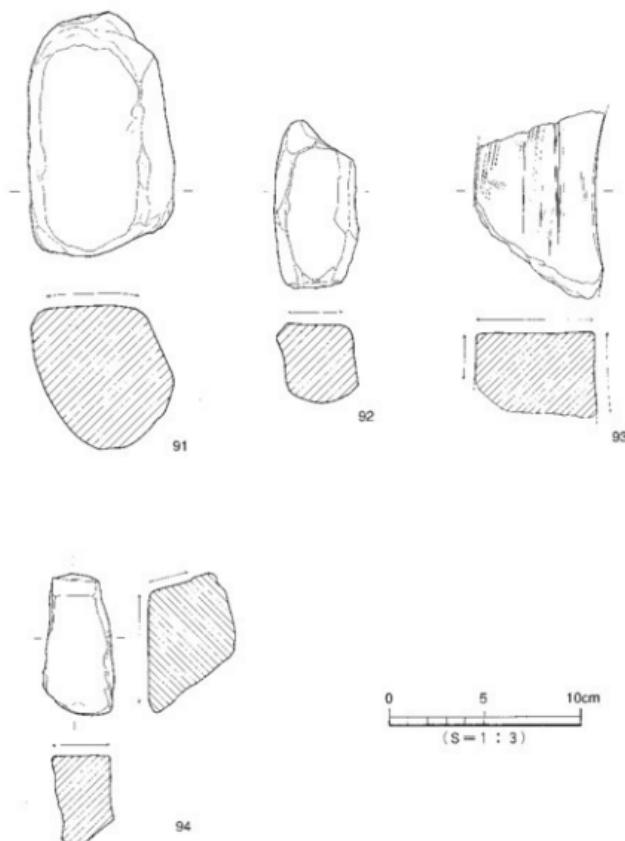
①SB1は7世紀の可能性はあるが、断定はできない。掘立1は出土遺物より13世紀代であろう。

②掘立5はSD2を切っており、SA1もSD2を切っている。そして、SA1は方位を掘立5と同じくするため、掘立5とSA1は同時存在の可能性がある。

③検出遺構は切り合い関係より溝が古く、掘立柱建物と樋が新しいことが分かる。掘立1



第146図 包含層出土遺物実測図 (8)



第147図 包含層出土遺物実測図 (9)

が13世紀代であることより、溝は調査地内の出土物より弥生後期から12世紀のものとみられる。

(3) 遺 物

①縄文晩期の資料が少量ではあるが出土している。グリット取り上げ品ではあるが実際に2m四方にも満たない狭い範囲での出土であり、同時性は高いものと考えている。よって出土器について弱干の整理を行うものである。

D 3 区出土品には深鉢 6 点、浅鉢 6 点、壺 1 点の計 13 点がある。

深鉢は肩部が屈曲（外反）するもの 5 点、2 条突帯のもの 1 点がある。口縁部の形状は、口縁端部に面をもつもの 3 点、先尖りのもの 2 点であり、刻目の有無は刻目をもつもの 3 点、刻目をもたないもの 2 点となる。口縁部下の突帯については、いずれも口縁よりやや下がる位置に突帯がつけられている。突帯の形状は三角形を呈し、刻目形状は「V」字状が 3 点、「D」字状が 2 点となる。なお、調査地内で出土した深鉢 7 点についても D 3 区出土品と大差はなかった。

浅鉢は 6 点が出土している。胴上半部は外傾～外反し、口縁端部が単に外反するものは 1 点、「く」の字状に外反するものは 3 点である。胴上半部が内傾するものは 2 点であり、口縁部内面には沈線や段をもつものが多くみられる。

壺は 1 点で、内傾する頭部に短く外反する口縁部をもつものである。

D 3 区及び調査地出土の縄文晩期土器は、道後今市遺跡 10 次包含層出土品に形態的に類似しているといえる。

②古墳～古代の土器は 7 ～ 8 世紀代が七体となり、来住台地においても出土量が少ない資料である。また、中世～近世の資料では貿易陶磁器片 3 点が注目される資料である。

以上、本調査地検出の遺構と遺物について報告を行った。時期比定可能な遺構が少なかつたが当地が 7 世紀には居住地として使用可能であることを推測できたことは来住・久米地区の集落動態を考えるには一つの資料となるものであろう。また、平野でも資料数の少ない縄文晩期の土器資料を得られたことは縄文研究にとって大きな成果といえる。

なお、古墳～古代の遺物については宮内慎一氏、中～近世については栗田正芳氏の助言を得た。末尾ではあるが記して感謝の意を表すものである。

〔文献〕

- 西岡早苗 1994 「江口貝塚出土の突帯文土器」『江口貝塚Ⅱ』波方町教育委員会、愛媛大学
湖西・成はか 1994 「道後今市遺跡X」『道後今市遺跡X』徳愛媛県埋蔵文化財調査センター

南久木片廻り遺跡 2次調査地

表56 穴式住居址一覧

穴 (SB)	時 期	平面圖	規 模		床面積 (m ²)	主柱穴 (本)	内 部 施 設		周壁溝	備 考
			長さ×幅×深さ(m)				高床	土坑	炉	
1	K5・6	隅丸方形	3.3×3.20×0.06		10.56	2				後文 後述

表57 挖立柱建物址一覧

掘立 柱	方 位	規 模 (間)	朽 行		梁 行		床面積 (m ²)	備 考	時 期
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)			
1	北	3×1	3.65	1.2×1.24×1.4	1.6	1.6×2	6.14		
2	西北	2×1	3.3	1.8×1.5	1.8	1.8	5.94		
3	南北	1×1	2.9	2.9	2.6	2.6	7.54		
4	東	2×1	4.3	2.2×2.1	2.4	2.4	10.32		
5		2×2	3.7	1.9×1.8	3.7	1.9×1.8	13.69		

表58 土坑一覧

土坑 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	填 土	出土遺物	時 期	備 考
1	B3	円形	皿状	0.95×0.90×0.03	黄褐色	なし		
2	C5	楕円形		1.05×0.55×0.06		なし		
4	D4	隅丸方形	舟底状	3.00×0.65×0.10	上・黑色土 下・灰褐色土	なし		
5	D3	椭円形	舟底状	1.75×1.10×0.40		なし		
6	C5	楕円形	レンズ状	1.20×0.70×0.04	黑褐色土	なし		

表59 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	填 土	出土遺物	時 期	備 考
1	B3~B2	直 線	8.0×0.3×0.04				
2	C9~C4		16.5×0.5×0.06				
3	C5		1.5×0.5×0.06				
4	E3~F3		7.0×1.1×0.05				SASに埋れる
5	E3~F3		9.7×0.6×0.06				SASに埋れる SD6を切る
6	G3~G4		5.9×0.65×0.05				
7	F1		1.7×0.35				
8	K1~E2		6.4×0.45				

遺物観察表

表60 SB1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
1	壺	口径(17.2) 残高 4.5	口縁端部は内折し、底をもつ。	①ヨコナデ ハケ	②ヨコナデ ナゲ	灰褐色 黄褐色	石-長(1~2) ○		
2	壺	口径(23.2) 残高 9.4	あるやかに外反する口縁部。 底部は丸い。	② マツツ ③ヨコハケ ④ マツツ	① ヨコナデ ②ヨコハケ	茶褐色 茶褐色	石-長(1~2) ○		
3	器種 不明	底径 8.3 残高 11.4	円柱状の土型器。加熱されている。	ナゲ		青灰色 黒褐色	石-長(1~5) ○		61
4	平底	残高 6.4	腹部に1条の凹縫をもつ。	①ヨコナデ カキ目	同軸ナデ	淡青灰色 乳白色	石-長(1) ○		
5	壺	口径(20.5) 残高 8.3	複合口縁部。3条1組の横 縫跡状火2段。	②ヨコナデ 窓文 ③ハラコヨコナデ ④ハラコナデ	②ヨコナデ ナゲ ③ヨコハケ ナゲ	淡褐色 淡白青色 淡白褐色	石-長(1~4) ○		
6	壺	底径(3.8) 残高 3.8	草札	ハケ ②アテ	ハケ +ナゲ	灰褐色 黑色	石-長(1~2) ○		
7	実物	底径(6.8) 残高 4.4	体部は中空。大きなくびれをもつ。	ナゲ+工具痕あり ②ナゲ		茶褐色 黄褐色	石-長(1~3) ○	選別	
8	壺	残高 4.5	側面凸出。凸面上の刻印は粗面。口縁外周部に「V」字形の沈痕。	ナゲ	ナゲ	褐色 深褐色	石-長(1~2) ○		

表61 包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
9	深鉢	口径(29.3) 残高 4.3	口縁端部に「D」刻目。 凸面上に「D」刻目。	②ヨコナデ	ナゲ	淡褐色 暗褐色	石-長(1~2) ○	縦 文 D 3 区	62
10	深鉢	残高 5.4	口縁端部に「D」刻目。 凸面上に「D」刻目。	②ヨコナデ	ナゲ+一部ハリリ	暗褐色 淡褐色 黑色	石-長(1~2) 食 ○	縦 文 D 3 区	62
11	深鉢	残高 4.6	口縁端部先丸り。凸面上に「D」刻目。	ナゲ	ナゲ(ミガキなし)	淡褐色 暗褐色	石-長(1~3) 金 ○	縦 文 D 3 区	62
12	深鉢	残高 3.1	口縁端部先丸り。凸面上に「V」刻目。	マツツ	ナゲ	灰褐色 黄褐色	石-長(1) 安山岩 ○	縦 文 D 3 区	62
13	深鉢	残高 5.3	口縁端部は削取り。凸面上に「V」刻目。	深鉢	ナゲ	青褐色 灰褐色	石-長(1) 金 ○	縦 文 D 3 K	62
14	深鉢	残高 5.1	2点突起。刻目大きく「D」刻目。	朱痕	ナゲ	黄褐色 深褐色	石-長(1) 金 ○	縦 文 D 3 K	62
15	浅鉢	口径(19.6) 底径(5.8) 残高 6.7	腹部で屈曲し、口縁部は「く」字形に反張。口縁内面に1条の沈痕。	②ナゲ 窓文 ③ヨコハケ ④ナゲ	②ナゲ ミガキ ③ナゲ	暗褐色 灰褐色	石-長(1) ○	縦 文 D 3 K	61

包含層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
16	浅鉢	残高 7.7	肩部で屈曲。口縁部は「く」字状に段をもつて反屈。	②ナデ ④条痕か?	ハクリ	黄褐色 褐灰色	石長(1~5) 金○	調文 D3区	62
17	浅鉢	残高 2.1	口縁部で屈曲し、口縁部は「く」字状に外反。内部に凹溝をもつ。	マメツ(ミガキ)	ミガキ	暗褐色 暗褐色	石・長(1) 金○	調文 D3区	
18	浅鉢	残底 2.3	口縁部で屈曲。口縁部は「く」字状に外反。	ナデ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) 金○	調文 D3区	
19	浅鉢	残高 5.5	直底口縁。「メ」字状の突起をもつ。全体に黒斑があり。	ナデ(一整ミガキ)	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2) 金○	調文 D3区	62
20	浅鉢	口径(20.6) 残高 6.4	人型浅鉢。口縁部は外反する。口縁内面に沈線。侈張に沈線。	ミガキ	ミガキ	黄褐色 黄褐色	石・長(1) 金○	調文 D3区	
21	盤	口径(17.4) 残高 3.5	内側する頭部に外反する口縁部。	② ロコナデ ④ 摂物ナデ	① ロコナデ ④ 摂物ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1) 金○	調文 D3区	

包含層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
22	敲打器	完形		8.2	6.5	5.4	390	D3区	61
23	敲打具	完形		11.3	9.0	5.0	725	D3区	61
24	石 盆	9.7/10		19.0	10.1	3.0	1,000	D3区	61

包含層出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
25	深鉢	残高 4.3	口縁部に「D」刻目。突起上に「D」刻目。	標準?	ナデ?	黄褐色 暗褐色	石・長(1) 金○		62
26	深鉢	残高 2.8	口縁部は先矢字で「O」刻目。突起上に「O」刻目。	ナデ(条痕?)	ナデ(マメツ)	黄褐色 黄褐色	石・長(1) ○		62
27	深鉢	残高 2.7	口縁部は先矢字で「O」刻目。突起上に「O」刻目。	ナデ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) ○		62
28	深鉢	残高 3.5	口縁部は先矢字で「O」刻目。突起上に「O」刻目。	ナデ	ナデ	黄褐色 茶色	石・長(1) 多○		62
29	深鉢	残高 2.3	口縁部を折り「V」刻目。凸部上に「V」刻目。	ロコナデ	黒色・茶色 黒色	石・長(1) 金○			62
30	深鉢	残高 2.5	口縁部は先矢字で「O」刻目。凸部上に「V」刻目。	マメツ	マメツ	茶色 褐色	石・長(1) 金○		62
31	深鉢	残高 2.5	二角尖鋸。突起上に「V」刻目。	マメツ	ナデ	褐色 暗褐色	石・長(1~2) ○		62

遺物観察表

包含層出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・縄文	調整		色調 (外觀) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
32	壺	残高 4.7 口径(16.7)	複合口沿。實指波状文 5 条1組2段。	ナゲ ④ナゲ	ハケ ④ナゲ	白灰色・灰白色 褐色	石・長(1~5) ◎		63
33	器台	残高 1.0 底径(7.5)	口沿端部に竹管文。	ヨコナゲ	ミガキ→ナゲ	黄茶色 青灰色・暗褐色	石・長(1~3) ◎		
34	第 (款)	残高 4.2 口径(18.2)	瓶底後部に竹管文。	ナゲ・ヨコナゲ ④ナゲ (指波あり)	マメツ	黄茶色 灰褐色	石・長(1~3) 金 ◎		63
35	壺	残高 4.6	口縁端部は内側に、腹を もつ。	④ヨコナゲ ④ハケ	ヨコナゲ ④ハケ	茶褐色 茶褐色	石・長(1) ◎		
36	高壺	残高 5.8	光燒技術。	④ヨコナゲ ④ハケ	ナゲ	淡褐色 淡褐色	石・長(1) ◎	黒斑	
37	両孔	残高 4.8	三角柱の柱軸。	マメツ	ヨコナゲ	乳黄色 乳白色	石 ◎	黒斑	
38	甌	残高 5.9	把手部。断面四角。	ナゲ	マメツ	淡黃褐色 明褐色	石・長(1~2) ◎		
39	甌	残高 7.6	把手部。前面指門形。	マメツ(ナゲ)	ヨコハケ	淡黃褐色 淡黃褐色	石・長(1~2) 金 ◎		63
40	甌	残高 7.2	把手部。前面跳丸一角形。	ナゲ	板ナゲ	淡茶色 淡茶色	石・長(1) 金 ◎	黒斑	63
41	舟形器	直径 3.2 (4.6) 厚さ 2.3	上製作跡有。瓶底言葉孔 (4.5cm)。	ナゲ (指波あり)		淡黃褐色 淡黃褐色	石・長(1) ◎		63
42	高壺	残高 12.3	底部は内窓。あるやかに ひらがる板張。	④ヘラナゲ→ナゲ ④ナゲ	④マメツ(ナゲ) ④ナゲ	茶褐色 茶褐色	E・長(1~3) 金 ◎		63
43	高壺	残高 9.0	柱部は中央。	④ヨコナゲ ④ナゲ	ナゲ	茶褐色 茶褐色	G・長(1~2) ◎		
44	平身	口径(0.7) 器高 3.2	たちあがり腰く内側し、 突部は上方にのびる。	④ヨコナゲ ④ヘラナゲ	④圓輪ナゲ ④ナゲ	青灰褐色 淡青灰褐色	青 ◎		63
45	甌	口径(25.6) 残高 3.6	口縁部は外反し、腹部は 丸味をもつ。	ハケ→細軽ナゲ	圓輪ナゲ	灰黑色 青灰色	青 ◎	自然和	
46	环壺	21.8×2.8 21.8×1.4 残高 2.4	宝珠様つまり。	目紐ナゲ	ナゲ	淡灰褐色	青 ◎		
47	环壺	21.8×2.8 21.8×1.0 残高 1.9	宝珠様つまりが行く。	④(同)目紐ナゲ ④(同)ヘラ留	ナゲ	乳灰色	青 ◎		
48	巧量	21.8×2.8 21.8×1.0 残高 1.9	宝珠様つまり。	目紐ナゲ	圓輪ナゲ	茶褐色 淡茶褐色	青 ◎		

包含層出土遺物観察表 土製品

(5)

番号	基種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色情(外面) (内面)	胎 土 焼	備 考	図版
				外 面	内 面				
49	環巣	φ16.8 2.5 φ16.6 0.9 残高 1.8	縦文浅つまみ。	圓軸ナデ	ナデ	淡灰色	密 ○		63
50	環巣	φ16.9 2.5 φ14.8 1.5 残高 2.0	縦文浅つまみ。	圓軸ナデ	ナデ	淡青灰色 淡灰色	密 ○	自然縫	
51	環巣	φ16.9 2.7 φ16.6 0.7 残高 1.4	縦文浅つまみ。	圓軸ナデ	ナダ*	淡茶灰色	密 ○		
52	環巣	φ16.9 (2.4) φ16.6 0.5 残高 1.1	畳平で、中央がわざかに凸形をなすつまみ。	圓軸ナデ	ナデ	淡灰色	密 ○		
53	環巣	口径(17.4) 残高 2.1	突起部のくらみは少なく、口端施部は下方へ腹曲向する。	④圓軸ヘラ削り ⑤圓軸ナデ	④ナダ* ⑤圓軸ナデ	乳茶灰色	密 ○		
54	環巣	口径(13.7) 残高 (10.2) 着高 3.2	底面部に、八の字形の高台を貼付する。口端部はやや外灰灰気に傾く。	圓軸ナデ	圓軸ナデ	淡灰色 淡青灰色	密 ○		63
55	环身	底径(11.1) 残高 1.5	底端部よりやや内間に、八の字形の高台を貼付する。	⑥圓軸ナデ ⑦ナダ*	圓軸ナデ	淡灰色	密 ○		63
56	环身	底径 (9.0) 残高 2.2	底端部に、八の字形の高台を貼付する。	⑧圓軸ナデ ⑨ナダ*	圓軸ナデ	淡灰色	密 ○		
57	底	底径(12.3) 残高 3.8	底端部に、八の字形の高台を貼付する。底地面はわざかに凹面をなす。	⑩圓軸ヘラ削り ⑪圓軸ナデ	圓軸ナデ	淡灰色 青灰色	密 ○		
58	底	口径(15.1) 残高 2.0	外端部は直く外傾する。底部の火入を矢張る。	⑫圓軸ナデ ⑬火入底	ナダ*	白灰色 淡茶灰色	密 ○		63
59	底	残高 15.7	底部はなだらかに弧する。	ナダ (工具痕)	ナデ	暗灰色 灰白色	密 ○		
60	不明	底径 (6.5) 残高 2.2	底面部に、高台を貼付する。	圓軸ナデ	圓軸ナデ	淡灰色	密 ○	底部に 自然縫	
61	不明	残高 3.9	体部外面に、1条の沈痕が見る。	圓軸ナデ	圓軸ナデ	深灰色	密 ○	自然縫	63
62	底	口径(22.4) 残高 4.8	口頭部は外反し、底面部は方形を呈する。	⑭圓軸ナデ ⑮印き	圓軸ナデ	淡青灰色	密 ○		
63	底	口径(22.7) 残高 5.0	口頭部は外反し、底面部は方形を呈する。	圓軸ナデ	圓軸ナデ	淡灰色	密 ○		
64	底	口径(14.1) 残高 2.8	口端部は外反し、端部は沈痕状に凹む。	ハケ→ヨコナデ	ヨコナデ*	乳白色	石・灰(1) ○		63
65	底	底径 (6.7) 残高 1.9	白色系土器基。円底高台。	アツツ ⑯ヘタ切り	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密 ○		61

遺物観察表

(6)

包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	構 葺		色調 (外面) (内面)	胎 燒 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
66	坏	底径(6.3) 残高 3.3	土器器。10世紀後半~11 世紀。	ヨコナデ ②マメフ	マメフ	乳白色 乳白色	青 ○		64
67	瓶	残高 3.3	内壇地。11世紀。	ヨコナデ ②ヨコナデ	マメフ	乳白色 黑色	青 ○		64
68	土口瓶	口径(29.8) 残高 10.3	頸部器。11世紀。	マメフ(圓軸ナデ)	マメフ(圓軸ナデ)	乳灰白色 乳黃灰白色	青褐色(1) ○		
69	坏	口径(16.2) 残高 4.0	瓦器。和泉系。13世紀。	マメフ	マメフ	黑色 淡黃色	青 ○	外側黑色	64
70	瓶	底径(7.2) 残高 1.9	土器器。輪窓有。12世紀。	ナデ(一體ヨコナデ)	マメフ	乳白色 乳白色	石(1) 少 ○		64
71	坏	底径(7.1) 残高 0.9	上部器。系切り。13世紀。	マメフ ②圓軸系切り+ 寸のこ痕	圓軸ナデ	淡灰白色 淡黃色	青 ○		64
72	碗	残高 1.7	白釉 口縁被玉縁。12~13世紀。			白灰色 白灰色	青 ○		64
73	碗	残高 3.4	青釉。楕条系。13世紀。			淡綠色 淡綠色	青 ○		64
74	碗	残高 1.8	青釉。楕条系。13世紀。			淡綠色 淡綠色	青 ○		
75	こね鉢	口径(27.6) 残高 3.8	束腰系。13世紀。	圓軸ナデ	圓軸ナデ	暗灰白色~黑色 灰色	青(石表(1)) ○		64
76	こね鉢	口径(28.7) 残高 4.6	束腰系。13世紀。	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰色 灰色	石表(1~2) ○		64
77	皿	口径(7.8) 底径(5.4) 残高 1.2	土器器小皿。14世紀。	ナデ ②圓軸系切り裏	ナデ	白黄色 白黄色	石・表(1) ○		64
78	皿	口径(7.3) 底径(6.5) 残高 1.4	土器器小皿。14世紀。	マメフ ②圓軸系切り	マメフ	乳白色 淡灰色	石(1) 少 ○		64
79	桶鉢	口径(30.0) 残高 4.6	偏圓系。15世紀。	ナデ	②ナデ →ハラケズリ	灰黃褐色 灰黃褐色	石表(1~6) ○		
80	桶鉢	口径(32.4) 残高 5.1	偏圓系。15世紀。	ナデ	ナデ	黑灰褐色 黑灰褐色	石表(1~3) ○		
81	桶鉢	残高 4.5	偏圓系。15世紀。	ナデ	②圓軸ナデ 脚隔文	深褐色~深灰色 深褐色	石表(1~3) ○		64

(7)

包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調　観		色調 (外側) (内面)	胎　土 燒　成	備　考	図版
				外　面	内　面				
82	壺体	口径(20.4) 残高 4.0	施文系: 16世紀。	圓點ナデ 輪摺文	ヨコナデ 輪摺文	赤褐色・褐色 青紫色	石長(1~3) ◎		64
83	桶体	口径(23.2) 残高 5.9	輪摺不明。	輪摺ナデ	圓點ナデ 輪摺文	淡青色・褐色 淡入黄色 青紫色・褐色	石長(1~2) ◎		61
84	釜	口径(15.0) 残高 2.8	15~16世紀初。	ナデ	ナデ(施文無あり)	淡茶色 灰黑色	石長(1~3) 金◎		64

包含層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
85	石　盤	完　形	ナスカイト	2.6	1.7	0.4	1.34		65
86	磨製石臼丁	約4／5	結晶片岩	7.3	3.1	0.6	22.2		66
87		約2／3		9.8	11.4	5.6	420		65
88	石　石	完　形		17.9	14.8	4.4	1,850		65
89	用途不明	9／10	綠色片岩	16.0	3.1	3.2	275		65
90	用途不明	完　形		15.6	6.3	3.5	365		65
91	石　石	完　形		12.8	7.7	7.6	1,000		65
92	乳　石	4／5		8.8	4.5	4.2	255		65
93	砥　石	約1／3		9.9	6.9	4.5	385		65
94	砥　石	完　形		7.5	3.7	4.6	155.5	写真付	65

第9章

イマ ザイ ケ

今 在 家 遺 跡

第9章 今在家遺跡

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯(第148図)

1990(平成2)年10月、松山市同和対策課より、松山市今在家町55、70、71、72の農道建設にあたり、当該地における埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。

申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「今在家遺物包含地」内にあたり、周知の遺跡として知られている。東方500mには官衙関連遺構を検出した久米高畠遺跡群、西方600mには弥生前期の壇柵墓や古墳時代の住居址を検出した石井東小学校遺跡、同方200mには縄文時代と考えられる集石遺構や弥生時代後期の土器溜りを検出した築成成分遺跡がある。

文化教育課と松山市立埋蔵文化財センター(以下、埋文センター)は当該地における埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲やその性格を確認するために、1990(平成2)年10月に立会調査を実施した。立会調査の結果、堅穴式住居1基、溝数条ほかを検出し、当該地に集落関連遺構があることを確認した。

この結果を受け、文化教育課と同和対策課の両者は協議を行い、遺跡が確認された地域について、記録保存のために発掘調査を実施することになった。発掘調査は、当該地及び周辺地域の集落構造解明を主目的とし、埋文センターが主体となり、1990(平成2)年11月3日に開始した。

(2) 調査組織

調査地 松山市今在家町55、70、71、72

遺跡名 今在家遺跡

調査期間 平成2年11月3日～同年12月28日

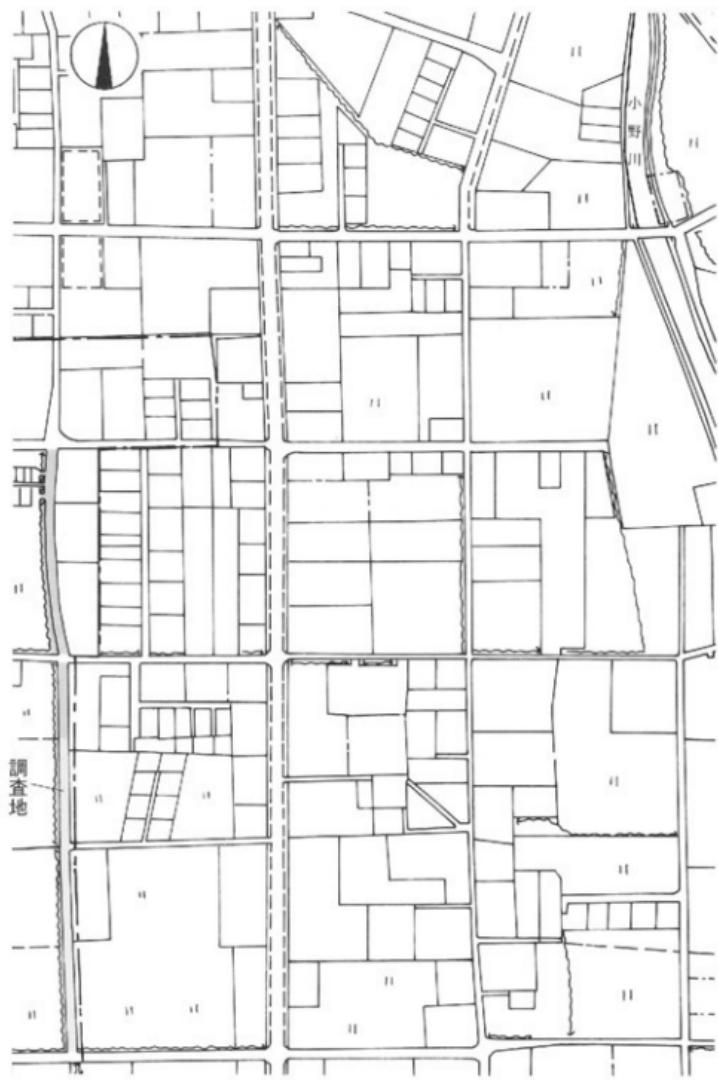
調査面積 対象面積 2,016m² 実施面積 約600m²

調査委託 松山市同和対策課

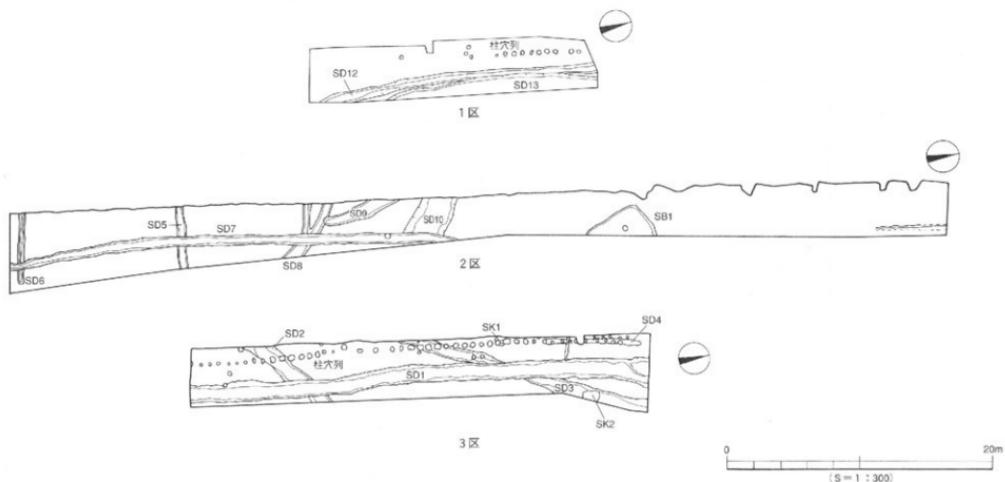
調査担当 相原浩二

調査作業員 武田和高、相良浩志、大庭 誠、松友利夫、西田竜一、松木正義
兼久一郎、川井 正、渡辺常信、山口吉一、藤家厚美

整理作業員 山辺進也、岩間信一、仙波千秋、仙波ミリ子、金子育代、高尾久子
東山里美



第148図 調査位置図 ($S = 1 : 3,000$)



第150図 造構配置図

2. 層位 (第151図)

松山平野を西流する小野川と重信川の間に広がる沖積地は広範囲の氾濫原である。調査地は水田で、標高は32.20mを測る。基本層位は第1層灰色土、第2層明白色土、第3層黄橙色土、第4層明灰色土、第5層暗黄灰色土である。

第1層は耕作土、第2層は耕作上の漸移層、第3層は鉄分の集積層である。第4層は部分的に未検出で、層中からは弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器などの弥生時代から中世までの遺物が少量出土する。第5層は無遺物層で、上面では遺構を検出している。

調査は、第5層上面を遺構確認面とした。第5層は1区北端が若干高く、3区南端との北高差は約30cmである。

調査では、既存の道路を境にし北から1区、2区、3区と呼称し(第149図)、各調査区内は磁北にあわせ5m四方のグリッドにわけ調査を行った。

3. 遺構と遺物

調査では第5層上面で弥生時代、古墳時代、古代以降の遺構と遺物を検出した(第150図)。以下、時代ごとに記述を行う。

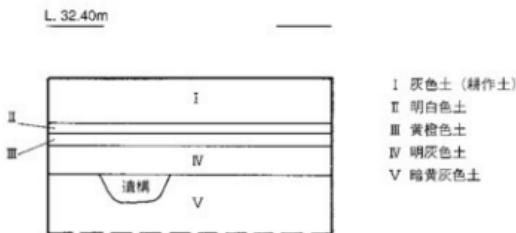
(1) 弥生時代

(1) 土坑

本調査で確認した弥生時代の土坑は2基(SK1・2)である。

SK1 (第152図、図版67)

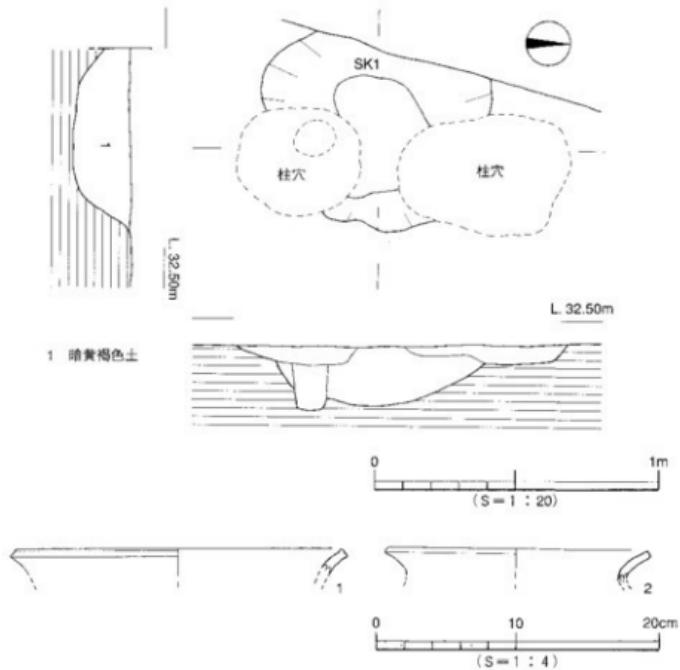
SK1は、3区で検出し、西側上部は調査区外となっている。上部は一部が柱穴列に切られている。平面形態は不整形で、断面形は船底状を呈する。規模は長さ0.85m、幅0.60m、深さ0.20mを測る。埋土は暗黄褐色土の單一層で、遺物は弥生土器片が数点出土している。



第151図 基本層位図 (S=1:20)

出土遺物（第152図）

壺形土器（1・2） 1・2は壺の口縁部である。1は推定口径23.0cmで、口縁端部は上方につまみ上げられる。2は推定口径18.2cmで、口縁端部は断面「コ」字状を呈する。
時期：出土した壺の口縁部形態から、弥生時代後期としておく。



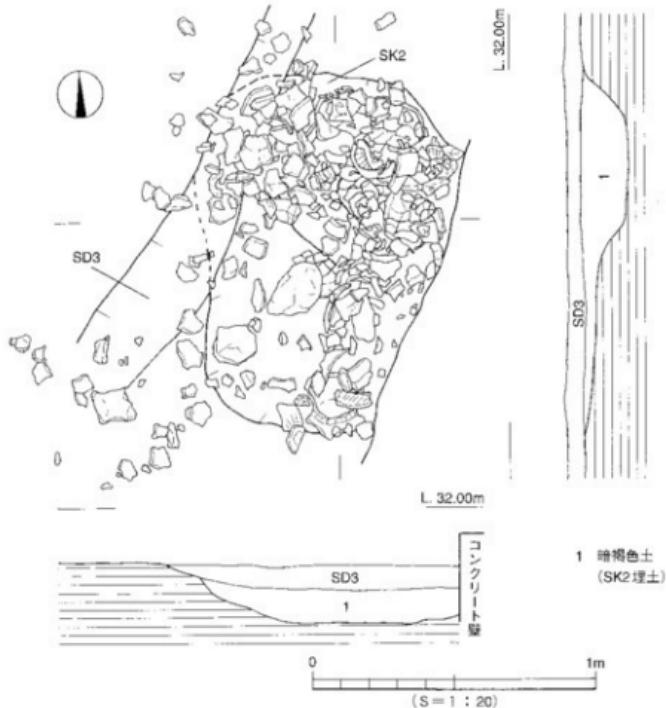
第152図 SK1測量図・出土遺物実測図

SK2（第153図、図版68）

SK2は、3区で検出し、上部はSD3に切られ、東側の一部は調査区外となっている。平面形態は隅丸方形状を呈し、断面形はゆるやかな船底状を呈する。規模は長軸1.25m、短軸0.70m、深さ0.24mである。埋土は暗褐色土である。遺物は多量に出土し、特に北側に集中して出土した。一括投棄の可能性が高いものである。

出土遺物（第154～157図、図版71～74）

甕形土器（3～7） 3・4は「く」の字状の口縁部をもつ甕形土器である。3の胸部は長胴で、最大径は胴中位より上にあり、口径を凌ぐ。底部は平底。調整は、外面が刷毛目調整、内面上部は刷毛目調整、下部はナデ調整される。4は丸みをもつ胸部で、胴部最大径は胴中位よりやや上にあり、口径を凌ぐ。底部は欠損。調整は、外面が刷毛目調整、内面は胴上半に刷毛目が看取される。5は胴上半が欠失している。底部は平底。調整は内・外面とも刷毛目調整である。6は口縁部が欠失している。胴部は肩の張りが弱く、胴部最大径は中位よりやや上にある。底部は平底。調整は外面刷毛目調整、内面は崩滅のため不明である。底部内面に指痕痕が看取される。7は口縁端部が先細りする。胴部最大径は胴中位より上にあり、口径を凌ぐ。底部は厚い平底である。調整は外面刷毛目調整、内面はナデ調整される。



第153図 SK2測量図

壺形土器（8～18）複合口縁壺、短頸壺、長頸壺がある。

複合口縁壺（8～11）9～11は口縁接合部が「く」の字状を呈し、8は「コ」の字状に仕上げられたものである。8は口縁接合部が長いタガ状を呈し、接合部の外端部には2条の沈線を施す。口縁拡張部には3条の横沈線文と6条一対の縱沈線文を配し、沈線文帯の下には斜格子目文が施されている。9は長頸で広口口縁壺に、拡張部がつくものである。頸部と胴部の境には断面三角形の凸帶を1条施し、凸帶上には刻日を施す。10は頸部と肩部の境には斜格子目文の凸帶が施され、口縁拡張部には波状文を施している。11は口縁拡張部が直立気味にたちあがる。

短頸壺（12・13）12は胴中位部に最大径をもち、肩が張る。胴部は丸く、胴部最大径は胴中位にある。調整は外面刷毛目、内面は刷毛目調整、胴部と頸部の接合部は強く横ナデされる。13は短く外傾する頸部に、外反する口縁部がつくものである。

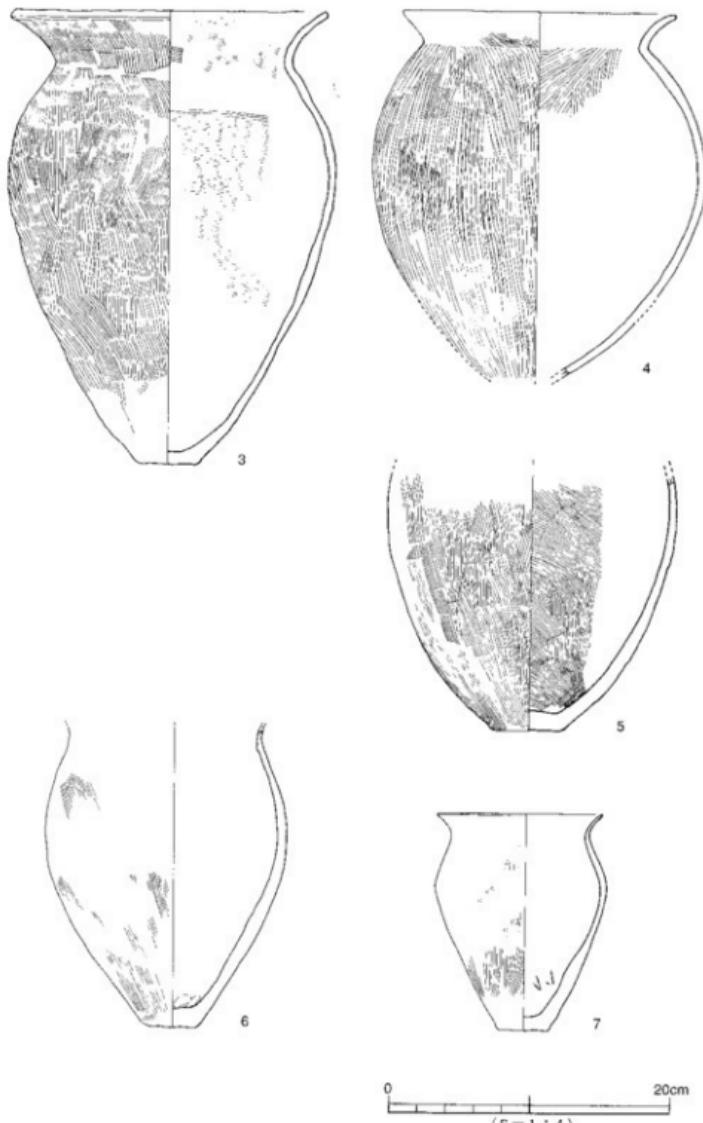
長頸壺（14～18）14・15は直立ないし外傾する頸部に、外反する口縁部がつくもので、口縁端部は細く丸く仕上げられる。調整は外面にタテ刷毛目調整、口縁内面はヨコ刷毛目調整、胴部内面は刷毛目調整後、ナデ調整される。16は直立する頸部に、上外方に内湾して立ち上がる口縁部をもち、口縁部には2条の沈線文を施している。17は細長頸壺で、口縁端部は欠失している。ボタン状に突出する平底をもつ。胴部は中位が内傾して立ち上がる。頸部下方には、6条の沈線を施し、胴中部には縱2列の棒状浮文を5箇所に施している。外面の調整は部分的に磨滅しているが、頸部、胴上位、胴中位は丁寧にヘラミガキをされている。胴下位から底部は縱方向の刷毛目調整である。内面は刷毛目調整、ナデ調整される。18は胴上部以上を欠失している。胴部外面には赤色顔料の痕跡が認められる。胴部は扁球形を呈し、焼成後の穿孔が胴部下位（1ヶ所）にみられる。調整は磨滅により不明である。内面の胴部上位には指頭痕を残している。胎土と色調が他の土器と異なるものである。

鉢形土器（19・20）19・20は口径に対して器高が約1／2の値を示すものである。19は平底の底部と、外傾して立ち上がる口縁部をもつ。20の口縁部は外反し、端部は先細りして丸くおさめる。底部はくびれの上げ底を呈する。

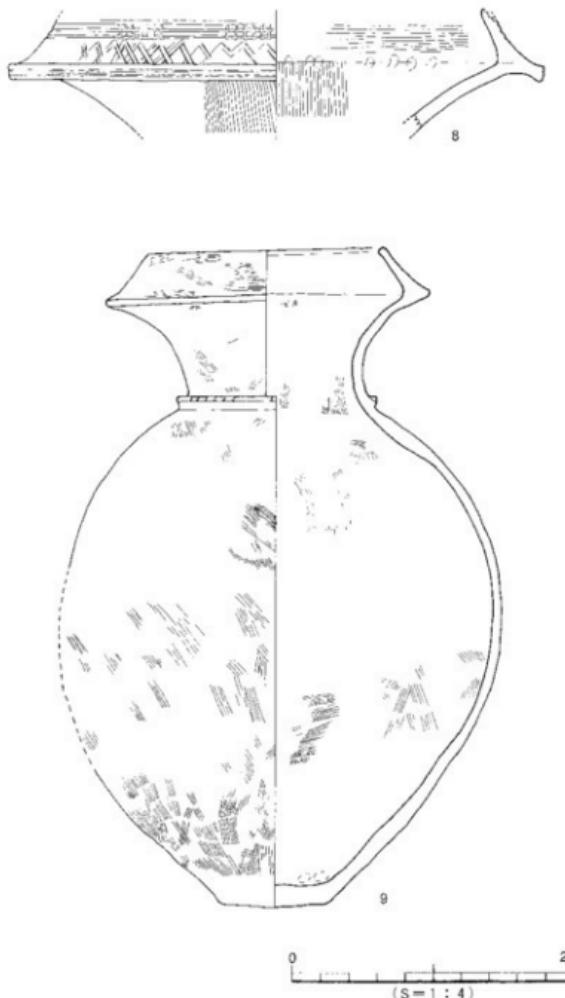
高坏形土器（21～23）完形品がなく器形がはっきりとしない。21は、坏底部に脚柱部を差し込んで接合するものである。調整は、坏底部外面と脚外面は刷毛目調整のあとヘラミガキされる。22の脚部には上下2段に円孔が穿たれている。23は脚部が外反し、円孔が穿たれている。調整は外面にヘラミガキがされる。

石庖丁（24）24は刃部が直線で、背部は両側が丸く、中央が直線状となるものである。紐を2ヶもつ。

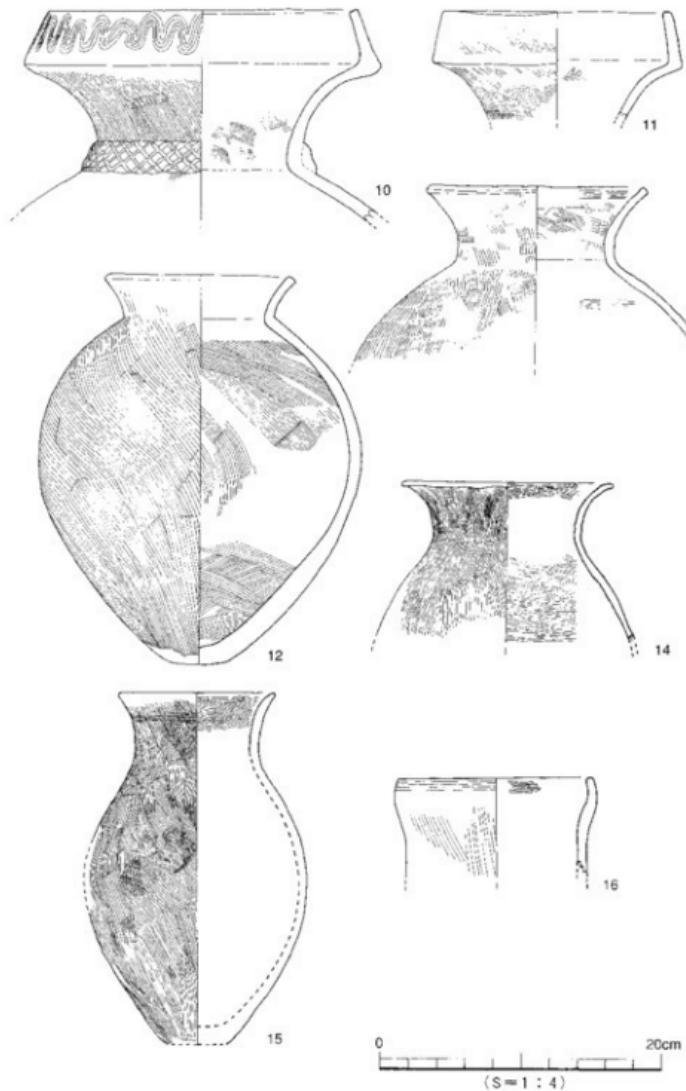
時期：出土遺物が弥生時代後期後葉の土器相を示すことより、本遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。



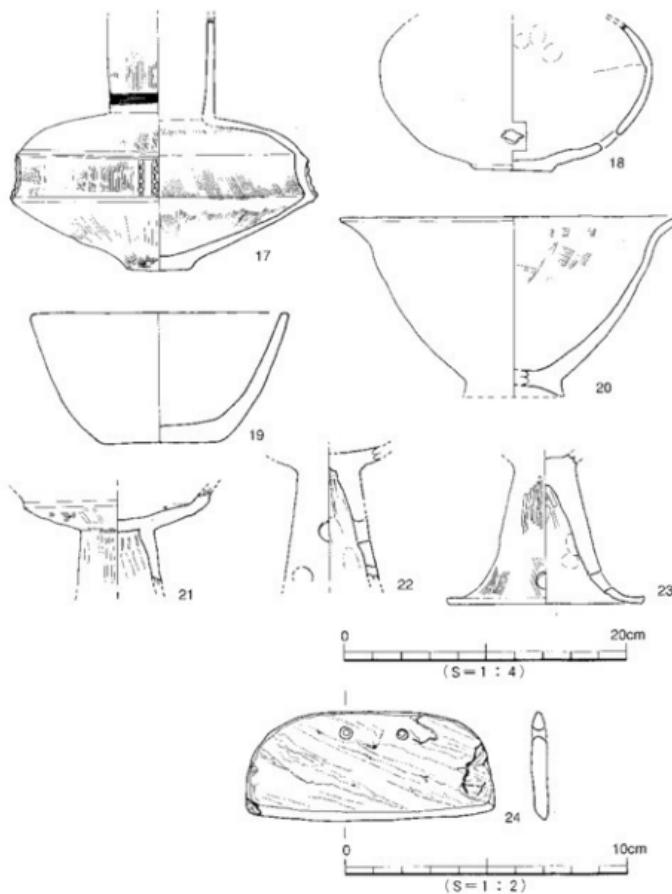
第154図 SK2出土遺物(1)



第155図 SK2出土遺物（2）



第156図 SK2出土遺物(3)



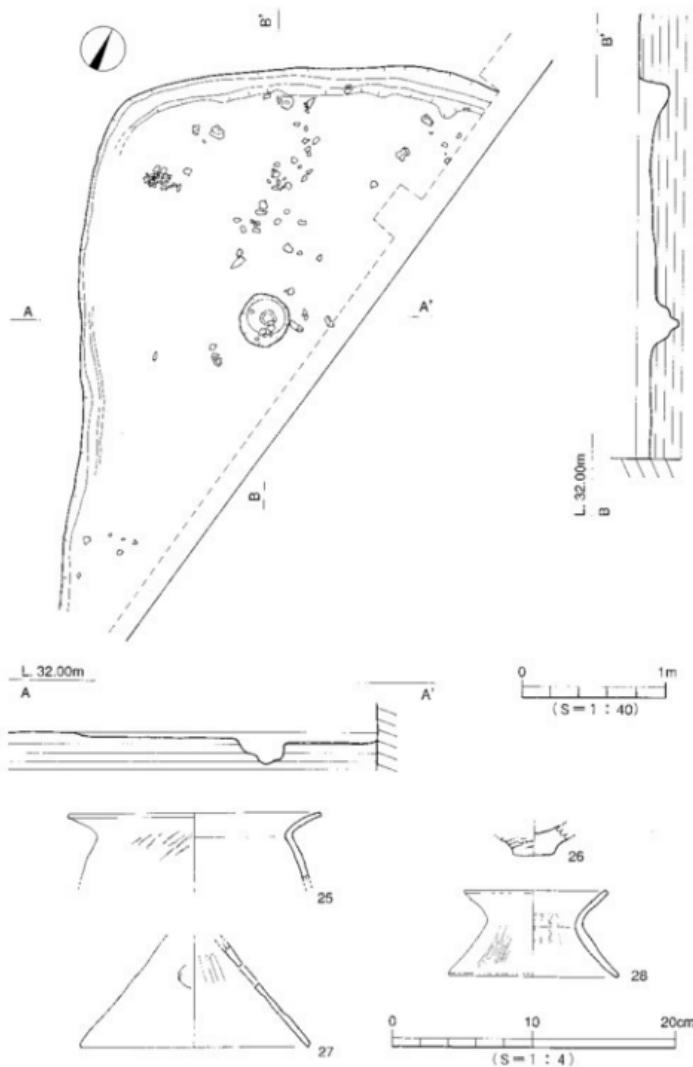
第157図 SK2出土遺物(4)

〔2〕古墳時代

竪穴式住居SB1と溝SD10である。

SB1 (第158図、図版69・74)

SB1は、2区の中央付近で検出した。住居址は全体の1/3程度の検出で、東壁と南壁は調査区外となる。平面形態は、隅丸方形を呈すると考えられ、規模は検出長で南北幅3.50m、東西幅2.50m、壁高0.06mを測る。埋土は黄灰褐色土の単一層である。住居址



第158図 SB1測量図・出土遺物

の北側と西側の一部には、断面U字状の壁体溝が巡り、幅20cm、深さ12cmを測る。床面では主柱穴を1基検出したが、他の主柱穴は調査区外である。炉址は確認できなかった。

遺物は床面直上からの出土で、特に住居北側からの出土が比較的多かった。出土土器は破片ばかりである。

出土遺物（第158図、図版74）

壺形土器（25・26） 25は「く」の字状の口縁部をもち、端部は「コ」字状を呈する。外面は叩き痕を残す。26は底部片で、やや丸みをおびた平底の小さな底部で、外面に叩き痕を残す。

器台形土器（27・28） 27は残高7.4cmの脚部である。直径1.8cmの円孔が2箇所に穿たれる。28は完形で口径10.1cm、器高6.2cm、底径12.0cmを測る。脚部は、「ハ」の字状にひらき、受部は外傾して立ち上がる。口縁端部は「コ」字状を呈する。調整は内外面ともナデである。

時期：本住居址の廃絶時期は、住居床面からの出土遺物より占墳時代初頭と考えられる。

S D 10（第159・160図、図版69）

S D 10は2区で検出し、東西方向に流れる。検出長は、長さ3.50m、幅2.60m～2.80m、深さ0.97mを測る。埋土は、上・中・下層に分層される。下層からは弥生上器と石庖丁、上層からは須恵器が出土している。中層からは、遺物は出土しなかった。

出土遺物（第160図、図版74）

（1）上層出土遺物

須恵器（29） 29は高台付きの壺で、推定口径15.4cm、器高4.6cmである。

（2）下層出土遺物

弥生土器（30～34） 30は壺で、口縁端部は強くナデされる。31は複合口縁壺で、接合部はタガ状を呈する。接合部外面と口縁拡張部にはヘラ状工具による斜格子文をもつ。32～34は壺もしくは壺の底部で、小さな平底をもつ。32の底部外側には2条の沈線が平行に施されている。

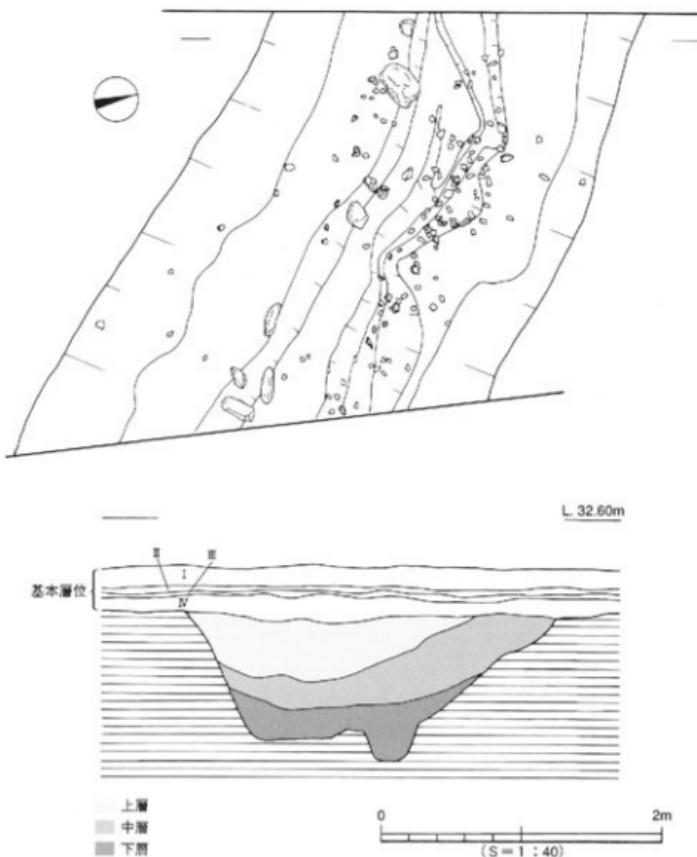
「石庖丁」（35） 35は成品の欠損品であり、約1/2が残る。材質は緑色片岩である。

時期：溝下層からは弥生後期の土器が出土し、上層からはMT 21に比定される須恵器壺が出土している。このことから7世紀後半には埋没したものと考えられる。

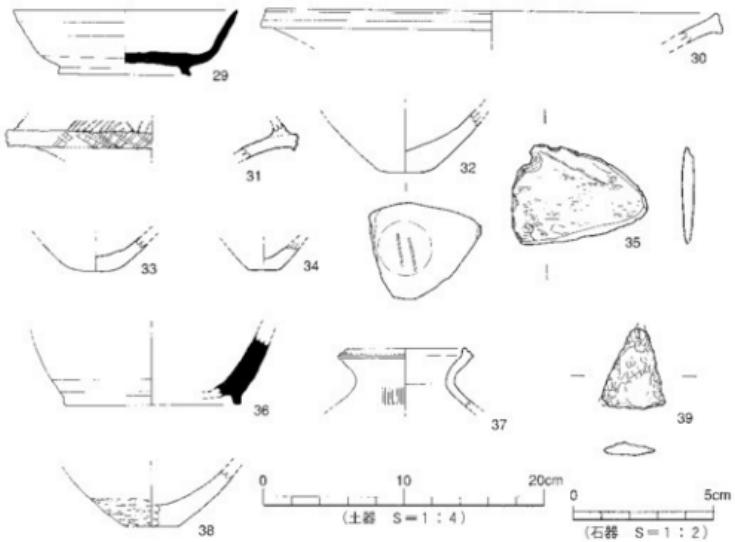
[3] その他の遺構・遺物

溝：本調査において検出した溝はSD 10以外に12条ある。これらの溝は、遺物が少量、もしくは皆無であるため明確に時期決定をするには至らなかった。溝の規模・埋土等は末表の遺構一覧に記載している。各溝からの出土遺物は第160図に掲載した。

36はS D 1出土品で、須恵器の長頸壺底部片である。37はS D 5出土品で、弥生時代中期末の壺の口縁部である。38はS D 8出土品で、弥生時代終末～古墳時代初頭の壺の底部である。39はS D 9の溝底から出土したもので、サスカイト製の石鏡である。



第159図 SD10測量図



第160図 SD出土遺物

柱穴列：1区と3区で検出された南北にのびる柱穴列で、その柱間は0.3m～0.4mとほぼ均一である。柱穴の平面形態は円形ないし梢円形を呈する。規模は直径0.2m～0.3m、深さ0.04m～0.10mと浅く、断面形態はレンズ状と円柱状のものがある。埋土は明黄灰色土の單一層である。1区ではSD12、3区ではSD1とはほぼ平行にあり、SD12とSD1の埋土と同一色である。

4. 小 結

弥生時代 3区で検出されたSK2からは多量の遺物が出土した。SK2は、松山平野において希な長頭瓶（第157図、17）や、胴部に穿孔された上器（第157図、18）が出土するなど祭祀色が強い遺構である。また、SK2出土遺物は一括遺物で、弥生時代後葉の土器編年には有効な資料である。

古墳時代以降 古墳時代初頭の竪穴式住居SB1は、同包蔵地内においては初例であり、当地における古墳時代初頭の集落存在を裏付けるものである。

また、1・3区で検出された南北にのびる柱穴列とSD12・1は、時期や性格を明確にすることはできなかったが、方向は現在の地割りと同一であり、SD1出土の8世紀代須恵器（第160図、36）を上限とすれば、古代の条里に関わる遺構とも考えられ、注意を要するものである。

今在家遺物包含地内は、試掘調査の件数に対し本格調査例は少なく、遺跡の様相は不透明であった。今回の調査は弥生時代後期から古墳時代、さらには古代の集落様相の一端を明らかにするものになった。今後の周辺地の調査では、集落の内部構造と範囲を確認するものとしたい。

遺構・遺物一覧（作成者：相原浩二）

一覧に関する凡例はP.188を参照されたい。

表62 積穴式住居址一覧

積穴 (SK)	時 期	平面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	主柱穴 (本)	内 部 施 設				開発者
					高床	土坑	炉	カマF	
1	古墳切削	隅丸方形状	後内長 3.50×2.20×0.06	(1)	—	—	—	有	1／3程度の検出

表63 土坑一覧

土坑 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	3区	不整形	斜底状	0.85×0.60×0.20	青灰褐色土	弥生土器片	弥生後期	
2	3区	不整形	船底状	1.25×0.70×0.24	青褐色土	弥生土器	弥生後期	1部開口区外

表64 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	3 区	船底状	34.50×1.30×0.30	青灰褐色土	弥生土器片、灰褐色土	古代以前	
2	3 区	船底状	6.00×1.20×0.38	④暗褐色土	弥生土器片	弥生	SD1に切られる
3	3 区	船底状	17.600×1.00×0.34	暗褐色土	弥生土器片	弥生後期以降	SK2を切る
4	3 区	U字状	1.80×0.20×0.10	青灰褐色土			
5	2 区	船底状	32.00×1.00×0.34	暗褐色土	弥生土器片	古代以前	SD6、7、8、10を切る
6	2 区	U字状	5.20×0.45×0.40	①暗褐色土			
7	2 区	浅鉢状	4.70×0.82×0.14	灰色砂礫			弥生後期以前
8	2 区	U字状	4.00×1.30×0.30	褐色土	弥生土器片	弥生後期以前	2条に分岐
9	2 区	浅鉢状	5.00×1.10×0.16	灰褐色土	石 磨		
10	2 区	船底状	3.50×2.80×0.97	④褐色土	△器、弥生土器、灰褐色土	古代以前	
11	1 区	船底状	10.00×1.20×0.21	灰褐色土			SD13に切られる
12	1 区	浅鉢状	12.00×1.20×4.00×0.18	灰褐色土	陶器片	近世以前	

表65 SK1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	施土 焼成	備 考	回版
				外 面	内 面				
1	甕	口径(23.0)	口縁端部につまみ上げられる。	マメツ	マメツ	褐色	石灰(1~3) ○		
2	甕	口径(18.2)	口縁端部は「コ」字状。	マメツ	マメツ	褐色	石灰(1~3) ○		

表66 SK2出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	施土 焼成	備 考	回版	
				外 面	内 面					
3	甕	口径 23.5 底高 32.2	唇部は四角があり、ゆるやかに側面を走る口縁部。口縁端部は「コ」字状。	①タテハケ(6本/cm) ②ハケ(6本/cm) ③ハケ(6本/cm) ④ナゲ	①ハケ+ナゲ ②タテハケ ③ナゲ	赤褐色 赤褐色	石灰(1~4) ○	黒絵	72	
4	甕	口径 19.2 底高 26.0	口縁部は外刃向に外反し、唇部は丸い。肩部はえみをもつ。	①マメツ ②タテハケ(3~4本/cm)	①マメツ ②タテハケ(3~4本/cm)	黄褐色 黄褐色	石灰(1~3) ○		72	
5	甕	底高 18.1	平底の底部より内側して立ち上がる脚部。	③タテハケ(7~8本/cm)	④ハケ(7~8本/cm) ⑤表面压痕	褐色 明褐色	石灰(1~3) ○	黒絵		
6	甕	底高 21.0	平底の底部。肩部の張りは弱い。	⑥タテハケ(7~8本/cm)	マメツ	產生 產生	石灰(1~3) ○			
7	甕	口径 10.8 底高 15.3	平底の底部。口縁端部は丸振り。	⑦ロコナゲ ⑧タテハケ(6本/cm)	マメツ	浅褐色 浅褐色	石灰(1~2) ○	黒絵	72	
8	甕	口径 14.6 底高 8.8	⑨3条の凹線上に間隔を置いて6本ずつの刻線。 ⑩黃褐色斜文子(3点)。	⑪ヨコナゲ ⑫タテハケ(4本/cm)	⑬ヨコハケ(4本/cm) ⑭タテハケ(4本/cm)	浅黃褐色 黃褐色	石灰(1~5) ○			
9	甕	口径 16.6 底高 46.7	⑮二点凸墨點貼り付け →斜目	⑯マメツ(ハケ) ⑰マメツ(ハケ)	⑱マメツ(一痕タケ) ⑲マメツ(ハケ)	褐色 褐色	石灰(1~5) ○		73	
10	甕	口径 21.8 底高 34.9	⑲鉢構文 ⑳凸墨點貼り付け→斜目文子	⑳ヨコナゲ ㉑タテハケ(8~9本/cm) ㉒タテ(一痕ハケ)	㉓タテ(8~9本/cm) ㉔タテ(一痕ハケ)	浅褐色 浅褐色	石灰(1~7) ○	黒絵	73	
11	甕	口径 16.2 底高 7.7	口縁端部がやや内側して立ち上がる。口縁端部は「コ」字状を呈する。	㉕ハケ(6~7本/cm) ㉖ナゲ	㉗タテハケ(5~6本/cm) ㉘ハヤシ(6~7本/cm)	マメツ	褐色 褐色	石灰(1~5) ○		
12	甕	口径 13.4 底高 27.7	側中筋部に複数をもつ。口縁端部は「コ」字状を呈する。	㉙ナゲ ㉚タテハケ(5~6本/cm)	㉛ハケ→ヨコナゲ ㉜タテハク(5~6本/cm)	㉝マメツ(ハケ)	黄褐色 黄褐色	石灰(1~7) ○	黒絵	72
13	甕	口径 15.0 底高 12.6	口縁は外反し。口縁端部は盛取りを行う。	㉞ハケ→ヨコナゲ ㉟タテハク(5~6本/cm)	㉟タテハク(5~6本/cm) ㉞マメツ(ハケ)	㉞ヨコハケ(8~9本/cm) ㉟マメツ(ハケ)	褐色 褐色	石灰(1~2) ○		
14	甕	口径 15.0 底高 11.3	口縁端部は強く外反し、唇部は丸い。	㉞タテハケ(8~9本/cm)	㉞タテハケ(8~9本/cm)	㉞ヨコハケ(8~9本/cm) ㉟マメツ	褐色 浅黃褐色	石灰(1~2) ○		
15	甕	口径 11.1 底高 25.0	わざかに外反する口縁部。口縁端部は丸みをもつ。	㉞タテハケ(9~10本/cm)	㉞ヨコハケ(7~8本/cm)	褐色 浅褐色	石灰(1~3) ○		73	

遺物観察表

SK 2 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	陶土 焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
16	壺	口径 13.6 残高 7.0	口縁部に沈底文 2 条。	テテハケ(4本/cm)	ナゲ	橙色 灰白色	石長(1~2) ○		
17	壺	直径 4.6 残高 18.0	身の各部にギザ模様に変化する平底。腹中部に複数列の横乳突文をもつ形で、底部はひび状。	①ギザギザ(1~2) ②ギザギザ(6本/cm) ③ナゲ	④メタツ(ナゲ) ⑤しづり直 ⑥ハケ(5本/cm) ⑦ナゲ(1~2ハケ)	褐色 灰色	石長(1~3) ○		73
18	壺	直径 5.6 残高 10.5	肩平の体態にわずかに突出する平底。施墨部の下方に焼成後の凹孔を察している。	マメツ	マメツ(全体) (抜目)	褐褐色 褐黃褐色	石長(1~3) ○		73
19	壺	口径 18.2 残高 9.2	大きめの平底。底文は深部で内側は丸くおさめる。	マメツ	マメツ	黄褐色 黃褐色	石長(1~3) ○	系墨	74
20	杯	口径 24.4 残高 12.5	くびれの平底。外輪するJ字型は縦筋が先端よりしてあくおさむ。	マメツ	①ハケ(7~8本/cm) ②ナゲ	淡黃褐色 褐色	石長(1~5) 黒色レキ ○		74
21	高杯	残高 6.7	底で浅底。 器蓋やや大きい。	ハケ+ミガキ	③ハケ+ナゲ ④ナゲ(しづり直)	褐色 褐色	石長(1~4) ○		
22	高杯	残高 9.5	身に凹孔が施されている。(肩中位に 2ヶ所、袖子位に 5ヶ所と思われる。) 器蓋は厚い。	マメツ	⑤マメツ ⑥ナゲ(しづり直)	褐色 褐色	石長(5~15) ○		
23	高杯	残高 10.3	身に凹孔が施されている。	ミガキ	ナゲ(1~2) (重ね)	茶褐色 茶褐色	石長(1~2) ○		74

表67 SK 2 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
24	(未丁)	完形	褐色片岩	8.7	3.9	0.6	31.75		74

表68 SB 7 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	陶土 焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
25	壺	口径 17.9	ゆるやかに内凹する肩部から外上方に強く扭曲し開く口部。	②マメツ ③タタキ	マメツ	灰白色	石長(1~3) ○		74
26	壺	残高 2.1	やや丸みをおびた平底の小さな笠壺。	④タタキ	マメツ	褐色 褐黃褐色	長(1~2) 短 ○		
27	壺	底径 16.0 残高 7.4	底径1.8cmの凹孔が2ヶ所に存在する。	マメツ	ケズリ	淡黃褐色	石長(3.5~2) 全 ○		74
28	壺	口径 10.1 残高 6.2 底径 12.0	身は外反気球形に凸出し、受部は屈曲し、外上方に聞く。	ナゲ	ナゲ	淡青色	石長(1~2) 全・赤魚上記 ○		74

表69 SD10出土遺物觀察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 燒 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
29	环	口径 15.4 高さ 4.6	底部から外縁して立ち上がり 口縁部は丸い。	目軸ナゲ	目軸ナゲ	灰白色	石(1~2) ○		74
30	環	口径 32.0	口縁端部は下方に記載される。	マメツ	マメツ	褐色	石(1~3) ○		
31	当	径高 2.7	口縁端部外側に斜移子長い ハラ彫きを施す。	ハケ→ナゲ	マメツ	灰白色	石(1~3) ○		
32	夷	残高 4.5	底部外周にハラ鉄工具による 2本の波浪文が平行に施され る。	マメツ	マメツ	灰色 褐色	6(1~2) ○		
33	夷	残高 2.5	丸みをもつた底面。	マメツ	マメツ	褐色	石(1~4) ○		
34	夷	残高 1.8	小さな下底の底面。	マメツ	マメツ	青黃褐色	石(1~3) ○		

表70 SD10出土遺物觀察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
35	(石)索丁	1/2	緑色片岩	4.6	3.4	0.4	32.168		

表71 SD1・5・8 出土遺物觀察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 燒 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
36	壺	残高 5.1	高台底部は丸みをもつ。	④輪軸ヘラケズリ ⑤目軸ナゲ	⑥正円軸ナゲ ⑦三字ナゲ	灰褐色 灰白色	素 ○	SD1	
37	壺	口径 8.4 残高 4.2	口縁端部に2条の凹線。	⑧ナゲ ⑨ミガキ	ナゲ	褐色	6(1~3) ○	SD5	
38	夷	残高 4.0	底部は平底。	⑩タタキ	ナゲ	灰白色	6(1~2) ○	SD8	

表72 SD 9 出土遺物觀察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
39	石盤	ほぼ完形	サヌカイト	3.7	2.2	0.4	2.238		

第 10 章

自然科学分析

10-1 上苅屋遺跡2次調査の植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

1. 試 料

試料は、SK1の埋土（茶褐色粘質土）とSK2の埋土（黒色土）の2点である。SK1は時期不明であるが、SK2からは6~7世紀の須恵器が出土している。（第69・70図）

2. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾（105℃・24時間）
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスピース添加（直径約40μm・約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散（300w・42kHz・10分間）
- 5) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピース個数に、計数された植物珪酸体とガラスピース個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10-5g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。

3. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表73および第161図に示した。

[イネ科]

機動細胞由来：イネ、キビ族型、ススキ属型（ススキ属、チガヤ属）、ウシクサ族型、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（おもにクマザサ属）、メダケ節型（メダケ属メダケ節、リュウキユウチク節、ヤダケ属）、タケアキ科（未分類等）

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

(1) SK 1 の埋土 (茶色粘質土) (第69図)

ネザサ節型や未分類等のタケア科、棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族型も比較的多く検出された。また、イネ、キビ族型、ススキ属型、クマザサ属型、メダケ節型なども検出された。棒状珪酸体はおもにイネ科植物の結合組織細胞に由来しているが、イネ科以外にもカヤツリグサ科やシダ類などでも形成される。棒状珪酸体の形態についてはこれまであまり検討がなされていないことから、その起源植物の究明については今後の課題としたい。おもな分類群の推定生産量 (第161図の右側) によると、ネザサ節型が圧倒的に卓越していることが分かる。

(2) SK 2 の埋土 (黒色土) (第70図)

SK 1 と同様の結果であるが、イネやススキ属型などは検出されなかった。

4. 考察

SK 1 および SK 2 の埋没当時は、ネザサ節などのタケア科植物が繁茂する状況であったと考えられ、ウシクサ族型の給源植物やススキ属なども見られたものと推定される。また、SK 1 の埋没当時には遺跡周辺で稲作が行われていたものと推定される。

参考文献

- 杉山真二 (1987) タケア科植物の機動細胞珪酸体、富士竹類植物園報告、第31号、
p.70-83。
藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) 一数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と
定量分析法一、考古学と自然科学、9、p.15-29。

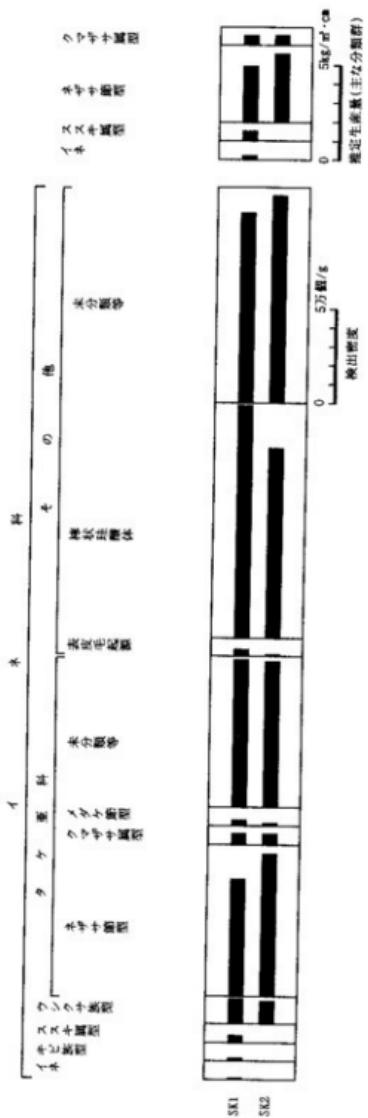
表73 上戸屋遺跡 2次調査の植物珪酸体分析結果
検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群 / 植物	SK1	SK2
イネ科		
イネ	7	
キビ族型	22	
ススキ属型	44	
ウシクサ族型	140	128
タケア科		
ネザサ節型	620	758
クマザサ族型	66	68
メダケ節型	37	15
未分類等	790	798
その他のイネ科		
丸葉水稻	44	8
棒狀水稻	1240	1014
未分類等	1018	1119
総検討割合	4029	3697

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m² · cm)

イネ	0.22	
ススキ属型	0.55	
ネザサ節型	2.98	2.64
クマザサ族型	0.60	0.51

※試料の張比重を1.0と仮定して算出。



第161図 上劉屋邊跡2次調査の植物珪酸体分析結果

10-2 愛媛県内の窯跡出土須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻利一

1. はじめに

土器の産地推定法の基本的な考え方は、まず、生産地が明確にわかっている土器の特徴を把握し、これに供給先の遺跡から出土した土器の特徴を対応させ、一致すれば、そこが産地であると考えるのである。この対応の作業ができるためには、生産地側の土器の特徴を充分把握しておく必要がある。

土器の特徴を把握する方法は勿論、土器の形式・胎土観察による考古学的方法も可能であろう。これで十分ならば、とくに考古学者によって土器の伝播・流通の研究はその縦年研究とともに完成されているはずである。実際には、ここに少なからぬ問題があるので、早くから、土器胎土を元素分析するという自然科学的手法に考古学者、自らが期待をかけたのである。この考え方は明石入骨の発見者である直良信夫の頃からすでにあったのである。しかし、土器の元素分析によって、生産地の土器の特徴を把握するには大量の土器片の分析が必要であり、当時は自然科学側もこの問題に十分対応できなかつたのである。つまり、土器片を粉末にするだけで大量の土器片試料の分析が可能な完全自動式蛍光X線分析装置の開発を得たなければならなかつたのである。日本でこの型の装置（勿論、外国製品である）が入手できるようになつたのは1970年代になってからである。筆者は1970年代の早々に、アメリカのケベックス社製のエネルギー分散型の装置を入手し、窯跡出土須恵器（生産地側の土器）の分析を開始した。現在は理学電機製の波長分散型の装置（3270型機）を使用している。この装置には48個の試料が搭載できる自動試料交換機が連結されており、1試料について、Na、K、Ca、Fe、Rb、Srの6元素を、そして約6時間かけて48試料を毎日分析している。この中の1個は必ず、岩石標準試料J G-1である。したがって、1週間（5日）で約200試料、1ヶ月間（4週として）で800個、1年間で約10,000点の試料の分析が可能である。このような分析能力をもつ装置を駆使すれば、全国各地にある窯跡出土須恵器の化学特性を把握することは十分可能であると判断した。筆者は20年間に2台の蛍光X線分析装置を使用した訳であるが、最初は2次ターゲット方式のエネルギー分散型の装置を使用した。この装置はTV上に蛍光X線スペクトルを表示しつつ測定することができるので、どの元素が地域差を表示する指標元素になるのかを探査する上に大変便利であった。全国各地の窯跡出土須恵器の蛍光X線スペクトルを観察しつつ見つけられた指標元素がRb、Sr（ともに微量元素）であり、K、Ca（共に主成分元素）であった。そして、各元素のピーク面積も計算され、J G-1で標準化された値を使ってRb-Sr分布図、K-Ca分布図を作成し、各地の須恵器の化学特性を比較することが可能となつた。こうして、各地の窯跡出土須恵器の

化学特性に地域差があることが発見されたのである。勿論、出来るだけ多くの元素を分析し、また、主成分元素については完全分析することは望ましい。しかし、それでは少數の試料しか分析できず、全国各地の窯跡出土須恵器の地域差を求める事は不可能であろう。筆者の考えは地域差を示す少數の元素を使って、出来るだけ多くの試料を分析し、各地の須恵器の地域差を出来るだけ早く求めるという点にあった。少數の元素といえども、地域差さえ求めれば、産地推定の作業が着手できるからである。他の元素については地域差を示すことがわかり次第、産地推定の作業に追加してもよい訳である。

約20年の歳月をかけて分析データを集積した結果、現在、全国各地の窯跡出土須恵器の地域差は求められており、Rb-Sr分布図とK-Ca分布図を描くことはできる。Na、Fe因子も場所によって地域差を示す場合もあるが、Rb、Sr、K、Caの4因子ほど有効に地域差を示さない。現在はK、Ca、Rb、Srの4因子が何故、有効に地域差を示すのか、また、Na、Fe因子は前記4因子ほど有効に地域差を示さないのか、その理由もわかっている。

供給先の遺跡出土須恵器の産地は大雑把にはRb-Sr分布図やK-Ca分布図で窯に対応させることによって可能である。しかし、きちんと産地推定をするためには、これだけでは不十分である。第一、生産と供給の関係が成立するためには、生産地である窯と供給先の遺跡が同時代のものでなければならない。この点で考古学側からの情報が必要となる。この情報を入れ、Rb-Sr分布図とK-Ca分布図で定性的に対応させつつ、産地候補をしづらる作業が第一段階で必要となる。そして、最終段階で2群間判別分析法という統計学的手法を導入する。すなわち、しづらりいくつかの産地候補の中から、逐次、2つの産地候補をとり出し、2群間判別分析をくり返すのである。この結果、元素分析からみて最も有力な産地候補が決定される訳である。この結果を考古学者が納得して受け入れるために、土器の肉眼観察による吟味が必要であろう。現在、この手法を使って、古墳時代のみならず、平安時代の須恵器の伝播・流通の研究が推進されている。さらに、この方法は中世陶器や瓦にも適用されている。

K、Ca、Rb、Srなどの因子は胎土が同じであるかどうかを判断する上に役立つとすれば、埴輪、上部器、弥生土器などの窯跡（生産地）がほとんど残っていない土器についても、いろいろの情報をもたらす。例えば、古墳の周りに並べられた埴輪の胎土は同じかどうか、もし異なるとすれば、胎土と配置に何らかの関係があるかどうかを調べることができる。このことから、データを集めることによって、埴輪の生産と供給の問題に触れることが可能であろう。また、同じ胎土の埴輪をもつ古墳同士を結び付けて、その関連性を考察することもできるだろう。さらに、古墳時代の後期には埴輪も窯窓で焼成される。この時期の埴輪については須恵器と同様にして、産地問題を考えることができる。同じ生産地で製作された埴輪を並べた古墳の被葬者は何らかの関係をもっていたはずであり、この点では、胎土分析はこれまでの考古学に新しい情報を提供することもできるだろう。今、胎土分析は各地の考

古学者に新しい情報を次々に提供している。これらのデータを十分消化できる新しい考古学者の出現が待たれる。以上が蛍光X線分析による古代土器の胎土分析の現況であるが、本項では愛媛県内の窯跡出土須恵器の分析結果をまとめて報告する。

2. 分析方法

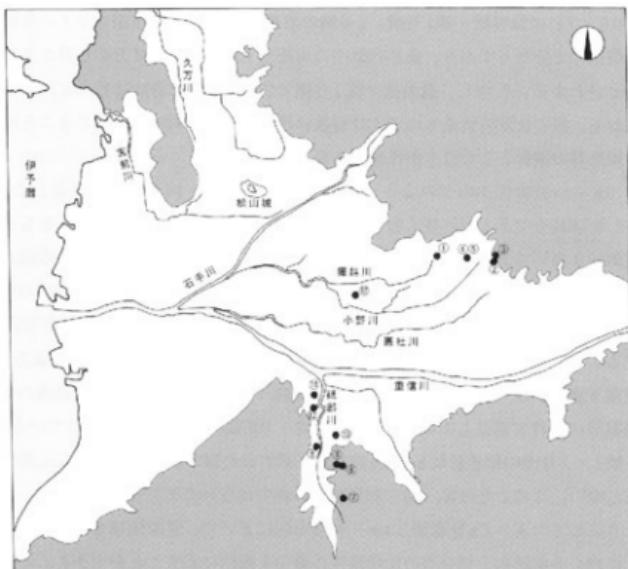
X線分析は表面分析であるので、表面を含めて近似的に均質と考えられる試料を作成することが必要である。自然灰釉などが付着している須恵器片をそのまま試料台に置いて測定しても、胎土そのものの分析データが得られるかどうかはわからない。筆者のところではまず、須恵器片の表面を小型研磨機で研磨し、表面に付着している浮物等を除去したのち、タングステンカーバイド製乳鉢の中で100メッシュ以下に粉碎する。粉末試料は塩化ビニール製リングを棒にして、約13トンの圧力を加えてプレスし、内径20mm、厚さ5mmの錠剤試料を作成した。この錠剤試料を試料ホールダーに固定し、48試料を自動試料交換台に並べて分析作業を開始する。通常、48試料のうちの1個は標準試料としてのJG-1であるが、JG-1の各元素の蛍光X線強度を調べることによって、分析作業が定常的に行われたことも確認できる。試料の分析値はデータ解析の便宜上、JG-1による標準化値で表示してある。この値を%やppm濃度に変換することは容易である。

今回のデータ解説にはRb-Sr分布図とK-Ca分布図を使用し、2群間判別分析は適用しなかった。特に、その必要性がなかったからである。しかし、本報告に示した分析値を使用すれば、容易に2群間判別分析もできる。

3. 分析結果

県内の窯跡出土須恵器の分析値は表76にまとめられている。これらの生データを使い、各窯跡出土須恵器のK-Ca分布図を作成した結果が第163・164図の1~8に示してある。これらの図には愛媛領域を描いてあるが、この領域は今回分析した試料ができるだけ多く包含するようにして、かつ、領域としてはできるだけ小さくなるようにして描いてある。この領域はとくに定量的な領界を示してゐる訳ではないが、この領域の内で各窯の試料がどのように偏在するかを比較することができる。いい換えれば、各窯跡出土須恵器の化学特性を端的に標示する上に大変便利である。そして、今回分析した試料の大部分がこの領域内に分布するという点から、愛媛領域と名付けられた。この領域は他県の窯跡出土須恵器の科学特性を比較する上にも便利である。

さて、この愛媛領域の内で各窯跡出土須恵器がどのように偏在して分布するかをみてみよう。第163図の1には通谷4号窯、第163図の2には千足1号窯の須恵器のK-Ca分布図を示す。いずれも、愛媛領域の右側部分に片寄って分布していることがわかる。これに対して、第163・164図の3~5に示した茨谷1号窯、枝栄下池3号窯、悪社谷1号窯の須恵器は愛媛



第162図 遺跡位置図 (S = 1 : 200,000)

表74 地名一覧

番号	遺跡名	所在地	遺跡	時期	備考
1	茨谷1号窯址	松山市平津町2576	窯址	7C初期	
2	桜塚下池3号窯址	松山市北梅本町	窯址	8C産業	
3	恵社谷1号窯址	松山市北梅本町	窯址		
4	駄場詫ケ瀬1号窯址	松山市北梅本町小野谷乙638	窯址	7C	
5	駄場詫ケ瀬2号窯址	同上	窯址	7C	
6	通谷池4号窯跡	伊予郡紙部町宮内1556 - 1573	窯址	8C前半	
7	千足1号窯跡	伊予郡紙部町千足400	窯址	8C前半	
8	坂の向8号墳	伊予郡紙部町	古墳	6C後半	
9	通谷山1号墳	伊予郡紙部町宮内1626	古墳	6C後半	
10	三角遺跡Ⅲ	伊予郡紙部町三角	集落	7~8前	
11	水潤田遺跡6次	伊予郡紙部町治町362-1	集落	7~8C	
12	久米官衙	松山市来住町・久米町	集落		
13	谷田窓跡群	伊予郡紙部町	窓跡		

領域の左側部分に分布し、愛媛県内の窯跡出土須恵器にも Ca 量に差異があることがわかる。第164図の6・7には駿場姥ヶ懐1号窯、2号窯の須恵器の K-Ca 分布図を示す。愛媛領域の左上部に偏在して分布しており、前述の県内の窯跡出土須恵器とはまた少し異なる化学特性をもつことがわかる。しかし、駿場姥ヶ懐1号窯と2号窯の須恵器はほとんど同じところに分布しており、同じ化学特性をもつことは容易に理解できる。両窯では同じところの粘土を採取し、須恵器の素材としたことが推察される。

次に、Rb-Sr 分布図をみてみよう。第164～166図の8～14に示してある。ここでも、今回分析した試料をできるだけ多く包含するようにし、かつ、最小限の広がりをもつようにして愛媛領域を描いてあるのは K-Ca 分布図の場合と同じである。第164・165図の8・9には通谷4号窯、千足1号窯の須恵器の Rb-Sr 分布図を示してあるが、愛媛領域の右側部分に偏在することがわかる。Ca と Sr は通常、正の相関性をもつので、両窯の須恵器は K-Ca 分布図でも、Rb-Sr 分布図でも、愛媛領域の右側部分に偏在する訳である。他方、茨谷1号窯、枝栄下池3号窯、恵社谷1号窯、駿場姥ヶ懐1・2号窯の須恵器は愛媛領域の中央部分から左側部分にかけて偏在していることは第165・166図の10～14に示されている。ただ、駿場姥ヶ懐1・2号窯の須恵器は K-Ca 分布図に示されたほど、愛媛領域の左上部分に片寄って分布しない。このことは K、Rb の相関性が単純ではないことを示している。

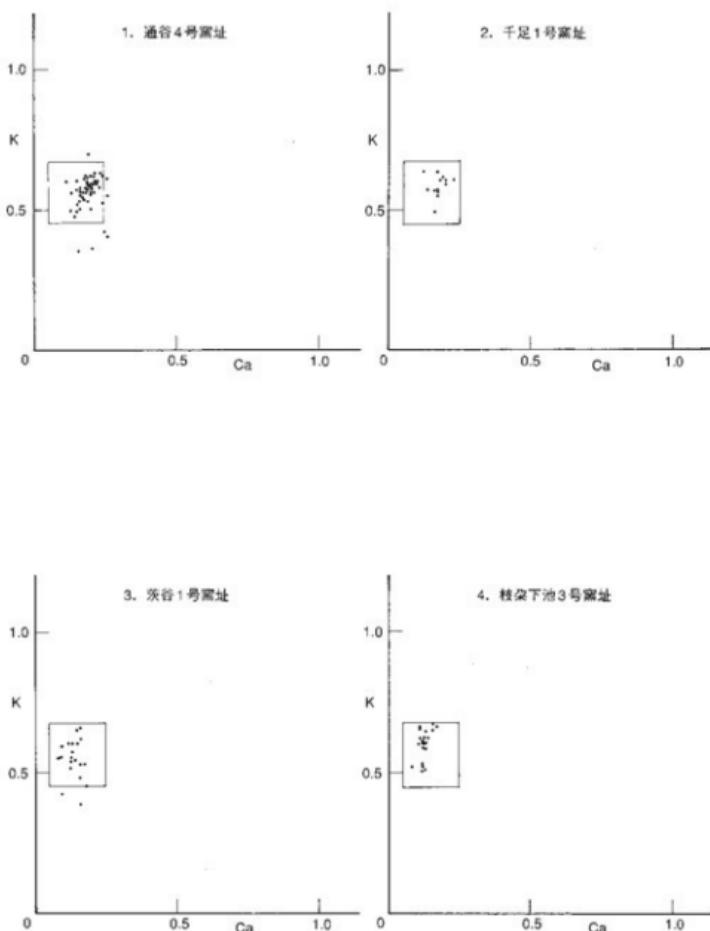
このようにして、K-Ca 分布図と Rb-Sr 分布図において、愛媛領域を適当に描くことによって、県内の各窯跡出土須恵器の化学特性の違いを端的に示すことができる。これらの図から、もし、2群間判別分析を適用すれば、通谷・千足群と他の窯群とは十分、相互識別できるものと予想される。その反面、県内の窯跡出土須恵器は愛媛領域にまとめられることになり、他地域の窯跡出土須恵器と比較されることになる。

ここで、Na 因子が窯間でどの程度に差異を示すかみてみよう。第167図に窯間の比較をしてある。余り明確な差異を示さないが、どちらかというと、通谷4号窯、千足1号窯、枝栄下池3号窯の須恵器には Na 量がやや多い目に、逆に、茨谷1号窯、恵社谷1号窯、駿場姥ヶ懐2号窯の須恵器には Na 量がやや少ない目に含まれていることがわかる。しかし、K、Ca、Rb、Sr 因子にみられるほどの差異は認められない。表76をみると、Fe 因子についても同様であることがわかる。ここでは Fe 因子の比較図は省略した。

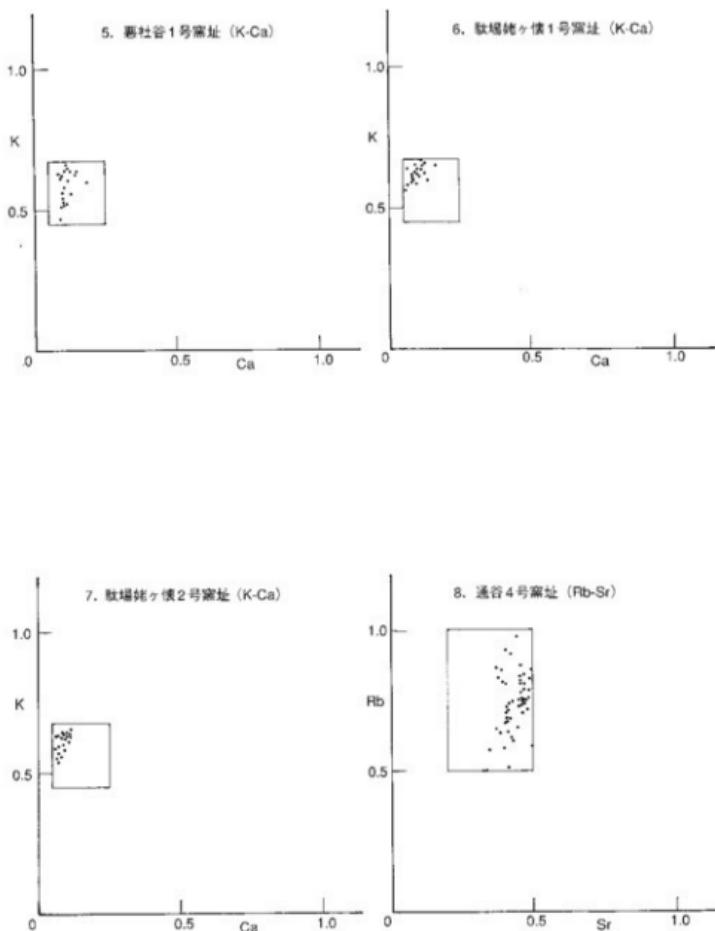
以上の結果、愛媛県内の窯跡出土須恵器の化学特性については、ある程度把握できた状である。今後、放射線分析法などによって、他の微量元素が地域差を示すことが立証される可能性もあるが、それが見つけられるまでは、K、Ca、Rb、Sr 因子が中心となって窯地推定の作業が進められる。

次に、筆者の手元に愛媛県内の遺跡出土須恵器の分析データが若干あるので、その結果を説明しておく。分析値は表75にまとめられている。

はじめに、6世紀後半～7世紀と推定される城の向8号墳、通谷山1号墳の須恵器の K-

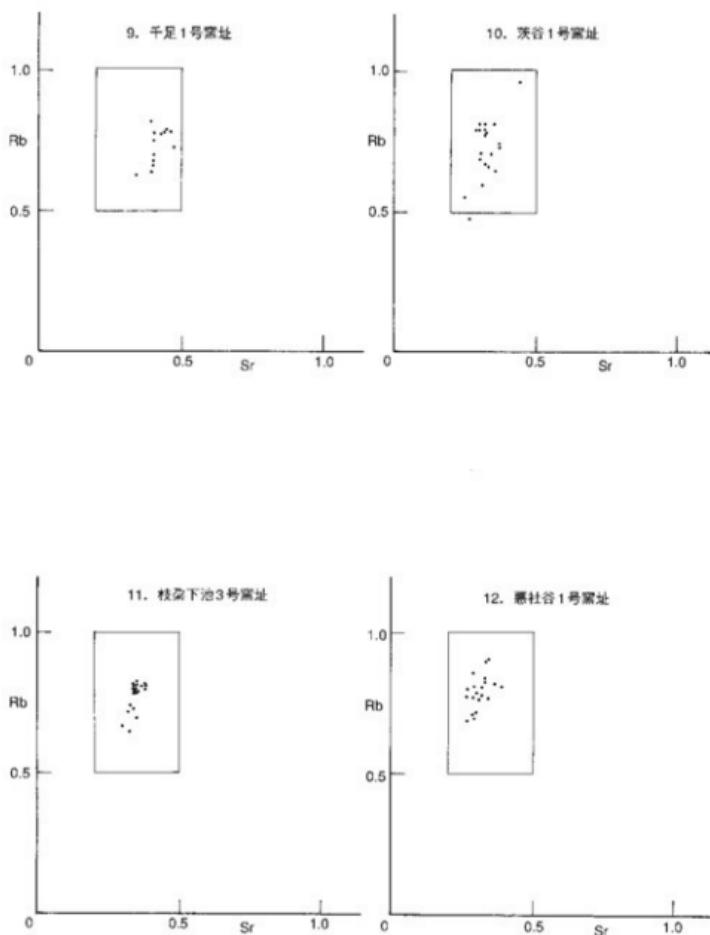


第163図 窯址出土須恵器のK-Ca分布図

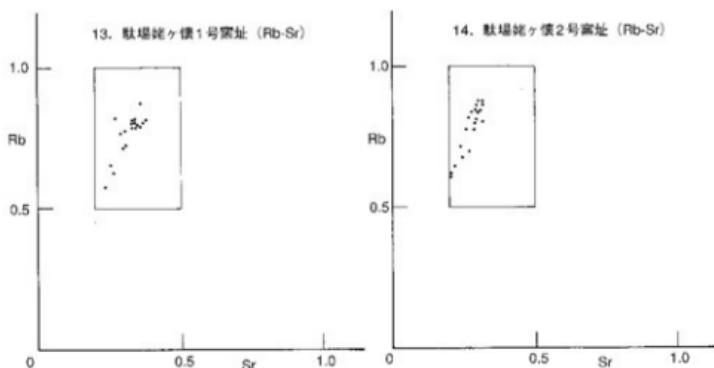


第164図 窯址出土須恵器のK-Ca・Rb-Sr分布図

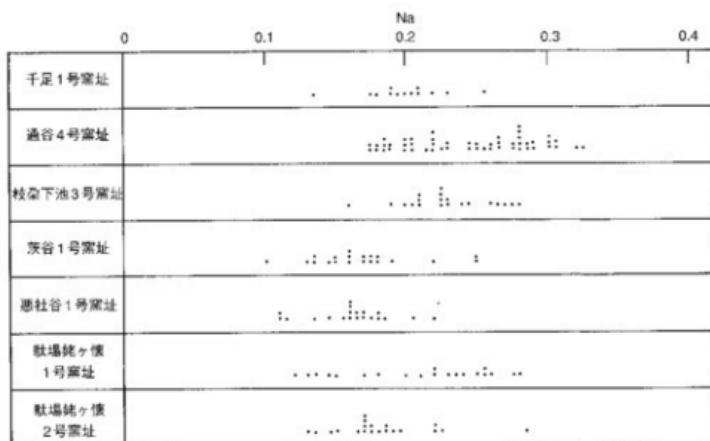
萤光 X 線 分析



第165図 窯址出土須恵器のRb-Sr分布図



第166図 窯址出土須恵器のRb-Sr分布図

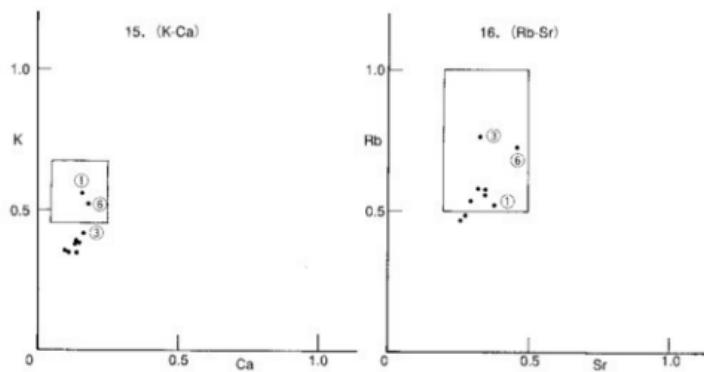


第167図 窯址出土須恵器のNa因子の比較

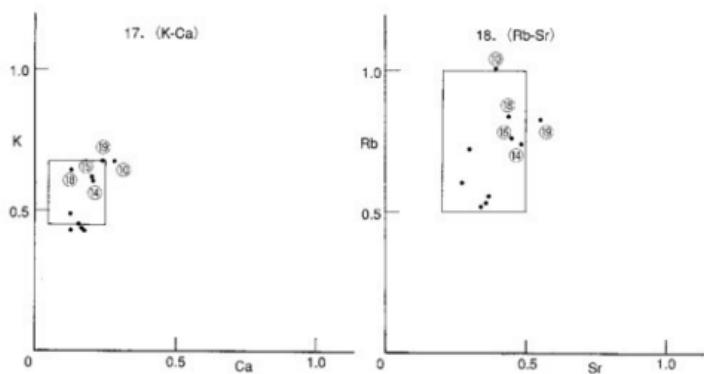
Ca分布図とRb-Sr分布図を第168図15・16に示す。これらの図をみると、大部分のものが前述した県内の窯跡出土須恵器の分布位置とは異なるところに分布していることがわかる。つまり、これらの須恵器の産地は前述した窯ではないことを示している。しかし、その分布位置は愛媛領域に近いところから、近辺に産地が求められよう。ところが、この時期に地元では谷田窯群が操業に入っている。実は、谷田窯群の須恵器がこの辺りに分布することが最近の再測定の結果から確認された。したがって、これらの古墳出土須恵器は地元、谷田窯群の製品と推定される。そうすると、四国西部地域でも6世紀後半～7世紀代にかけての時期に大阪陶邑産の製品が消えていることになる。筆者の手元には、全国各地にある5世紀代の古墳出土須恵器の分析データは1000点以上ある。そのうちの8割を越える須恵器が陶邑産と推定されている。形式的には陶質土器と推定されても、胎土分析では陶邑産と推定されるものが圧倒的に多い。このことは大庭寺型の初期須恵器の窯がまだ他にもあることを示唆している。つまり、多くの初期須恵器の製作には朝鮮半島から渡来した工人達が関わっていたことが推察される。ところが、九州北部地域や出雲地域の西日本側では、6世紀になると陶邑産の須恵器が検出されなくなることが最近の分析データでわかつてきただ。この時点で陶邑産の須恵器の全国各地の古墳への供給に、地域によって時期差があるのではなかろうかという疑問が浮かんできた。現在、全国各地の古墳への陶邑産の須恵器の供給に関するデータとともに、それが消失していくデータも併せて集積されつつある。もしかしたら、このデータが畿内政権と地方豪族との間のきずなの変動を示す物的証拠となるかもしれないと考えるからである。この点で今回のデータは注目されるが、今後さらに、このような観点から大量の分析データを集積する必要がある。

次に、三角遺跡、水溝田遺跡出土須恵器のK-Ca分布図とRb-Sr分布図を第169図17・18に示す。いずれも比較のために、愛媛領域を描いてある。両図を比較して、No11・12・13・16・17とNo10・14・15・18・19の2つのグループに分かれることがわかる。前者は谷田窯群の、また、後者は通谷4号窯の須恵器に類似した化学特性をもつ。これらの須恵器は上器形式からみて、谷田窯群と通谷窯群の中間の時期に相当する須恵器であるといわれる。もしかしたら、この時期に谷田窯群はなおかつ、操業を維持しており、他方の通谷窯では操業を開始していたのかもしれない。両遺跡とも、谷田窯群産と推定される須恵器と通谷窯群産と推定される須恵器が共存している点が注目される。この点についても、今後、さらに分析点数を増やし、考古学者との共同研究を推進する必要がある。愛媛県の須恵器生産についての興味あるデータが引き出されることが予想される。

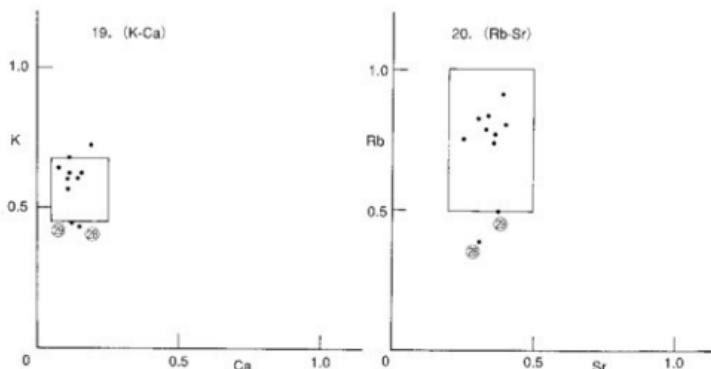
最後に、官衙関連遺跡出土須恵器のK-Ca分布図とRb-Sr分布図を第170図19・20に示しておく。ここでも、須恵器は2つのグループに分かれる点が注目される。No28・29は明らかに他の須恵器とは産地は異なる。さらに注目される点は8点の多数派の須恵器の分布位置は駄場姥ヶ懐窯、枝栄下池窯、悪社谷窯の須恵器の分布位置とよく対応するということ



第168図 古墳出土須恵器のK-Ca・Rb-Sr分布図



第169図 遺跡出土須恵器のK-Ca・Rb-Sr分布図



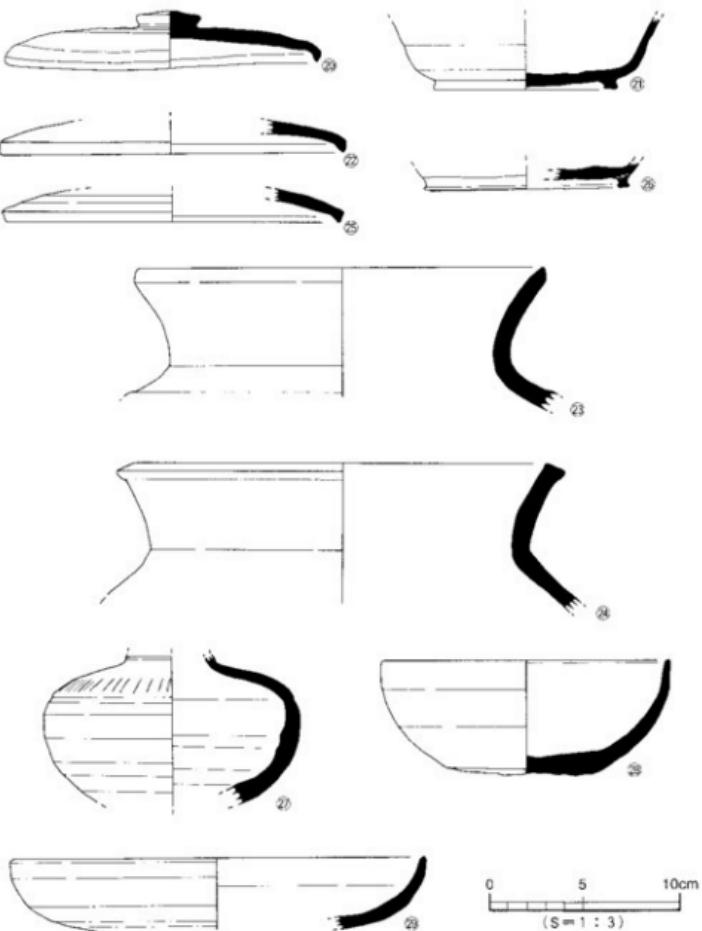
第170図 宮術関連遺跡出土須恵器のK-Ca・Rb-Sr分布図

である。これら8点の須恵器は地元の、これらの窯で作られた製品である可能性が高い。No 28・29はK-Ca分布図では谷田窯群の製品のようにもみえるが、Rb-Sr分布図では少しずれており、以下のところ、産地不明である。しかし、No 28とNo 29は同一窯で作られた須恵器である可能性をもつ。

以上に述べてきたように、胎土分析のデータからは従来の考古学では読めなかった新しい情報が引き出されることが理解されたと思う。この研究は方法開発の段階を経て、いよいよ、考古学者との本格的な共同研究を推進する段階に入ってきた。胎土分析のデータが読める新しい考古学者の出現が待たれる。

[註]

1. 二辻利一 1992 「砥部町周辺の窯跡及び遺跡出土の須恵器の蛍光X線分析」『砥部町内埋蔵文化調査報告書Ⅱ』愛媛県砥部町教育委員会



来住磨寺 10 次：①・②
来住磨寺 5 次：③～⑤
久米高畠 10 次：⑥～⑧
久米高畠 20 次：⑨・⑩
※①～⑩の出土地は表 75 を参照

第 171 図 官衛関連遺跡出土の須恵器

螢光 X 線 分析

表75 愛媛県内の遺跡出土須恵器の分析

遺跡名	試料No	出土地	基準	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	報告No	備考
城の向 8 号墳	①		長崎市	0.554	0.161	2.41	0.331	0.362	0.302		6 C後半
	②		焼	0.339	0.141	2.33	0.588	0.296	0.129		谷田窯址の可能性あり
	③		环身	0.412	0.162	2.71	0.767	0.331	0.120		
	④		环身	0.391	0.129	1.78	0.584	0.345	0.134		
	⑤		高环脚	0.376	0.133	1.48	0.577	0.318	0.129		
道谷山 1 号墳	⑥		壺	0.315	0.179	1.67	0.733	0.158	0.228		6 C後半～7 C
	⑦		杯蓋	0.384	0.162	1.85	0.566	0.348	0.162		谷田窯址の可能性あり
	⑧		壺	0.347	0.101	2.37	0.485	0.276	0.107		
	⑨			0.348	0.102	2.37	0.474	0.261	0.107		
三角遺跡 III	⑩		壺	0.669	0.283	1.61	1.01	0.368	0.295		7～8 C前
	⑪		环盤	0.476	0.128	2.65	0.521	0.344	0.271		谷田・道谷山1号の可能性あり
	⑫		壺	0.446	0.155	2.12	0.531	0.362	0.236		
	⑬		手鏡	0.428	0.167	2.33	0.723	0.203	0.306		
	⑭		壺	0.602	0.205	2.12	0.742	0.479	0.288		
水溝田遺跡 6 次	⑮		壺	0.608	0.203	2.26	0.782	0.446	0.234		7～8 C
	⑯			0.425	0.129	1.33	0.599	0.275	0.148		
	⑰			0.431	0.173	2.04	0.552	0.365	0.209		
	⑱			0.638	0.128	1.66	0.842	0.437	0.227		
	⑲			0.675	0.241	2.16	0.831	0.533	0.289		
宮衙間連遺跡	⑳		坪蓋	0.599	0.105	1.76	0.756	0.251	0.147	第171回	東住吉寺10次
	㉑	X14-2層	青島台坪	0.641	0.075	1.77	0.827	0.299	0.284	第171回	東住吉寺10次
	㉒	圓窓2	坪蓋	0.600	0.142	1.78	0.738	0.358	0.272	第171回	久米高畠10次
	㉓	圓窓2	壺	0.616	0.154	1.40	0.812	0.400	0.197	第171回	久米高畠10次
	㉔	圓窓2	壺	0.675	0.112	1.86	0.838	0.336	0.257	第171回	久木高畠10次
	㉕	SD7-中層	坪蓋	0.564	0.111	1.64	0.774	0.367	0.257	第171回	久米高畠20次
	㉖	SD7	青島内坪	0.719	0.191	1.81	0.915	0.390	0.262	第171回	久木高畠20次
	㉗	SX01-上層	長颈瓶	0.616	0.114	2.42	0.793	0.327	0.227	第171回	東住吉寺5次
	㉘	SX01-上層	壺	0.425	0.148	2.63	0.294	0.209	0.181	第171回	東住吉寺5次
	㉙	SX01-床面	壺	0.442	0.119	1.76	0.495	0.373	0.226	第171回	東住吉寺5次

表76 愛媛県内の窯址出土須恵器の分析

(1)

遺跡名	出土地	基準	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	報告No	備考
千足1号窯跡			0.570	0.174	2.07	0.686	0.403	0.212		
			0.616	0.192	2.17	0.770	0.427	0.257		
			0.613	0.204	2.24	0.780	0.437	0.230		
			0.640	0.120	2.25	0.820	0.386	0.231		
			0.552	0.172	2.08	0.667	0.396	0.191		
			0.600	0.198	2.08	0.770	0.426	0.267		
			0.574	0.173	2.34	0.765	0.404	0.177		

(2)

愛媛県内の窯址出土須恵器の分析

遺跡名	出土地	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	報告No	備考
牛足1号窯跡			0.609	0.177	2.27	0.766	0.404	0.210		
			0.606	0.230	2.59	0.774	0.459	0.199		
			0.644	0.170	2.01	0.717	0.472	0.180		
			0.488	0.156	2.35	0.624	0.342	0.190		
			0.375	0.144	2.35	0.631	0.390	0.134		
			0.574	0.169	2.21	0.655	0.396	0.196		
			0.588	0.202	2.56	0.749	0.437	0.289		
通谷池4号窯跡			0.575	0.154	1.76	0.806	0.414	0.258		
			0.283	0.212	1.92	0.756	0.484	0.267		
			0.591	0.187	1.80	0.806	0.464	0.299		
			0.583	0.178	2.47	0.731	0.410	0.245		
			0.486	0.128	2.07	0.591	0.497	0.183		
			0.623	0.195	1.43	0.880	0.457	0.280		
			0.351	0.137	1.30	0.568	0.333	0.188		
			0.420	0.251	1.95	0.618	0.426	0.229		
			0.401	0.258	1.40	0.610	0.429	0.202		
			0.469	0.141	1.73	0.519	0.418	0.199		
			0.351	0.164	2.81	0.637	0.385	0.203		
			0.503	0.204	2.59	0.684	0.414	0.218		
			0.492	0.152	1.61	0.691	0.409	0.244		
			0.531	0.157	1.69	0.652	0.376	0.175		
			0.263	0.176	2.50	0.719	0.408	0.248		
			0.695	0.194	1.79	0.811	0.476	0.325		
			0.552	0.261	1.94	0.735	0.459	0.279		
			0.682	0.233	2.38	0.763	0.461	0.281		
			0.584	0.192	1.91	0.783	0.459	0.306		
			0.559	0.176	1.51	0.726	0.456	0.288		
			0.522	0.242	2.16	0.707	0.471	0.253		
			0.542	0.174	1.68	0.644	0.410	0.203		
			0.599	0.149	1.55	0.675	0.413	0.218		
			0.382	0.182	1.55	0.786	0.467	0.319		
			0.621	0.214	2.32	0.732	0.453	0.267		
			0.615	0.186	1.64	0.823	0.463	0.298		
			0.600	0.223	1.61	0.978	0.445	0.198		
			0.508	0.184	1.55	0.841	0.474	0.299		
			0.382	0.195	2.46	0.742	0.415	0.265		
			0.547	0.259	2.35	0.722	0.484	0.264		
			0.573	0.151	1.72	0.835	0.381	0.223		
			0.626	0.236	2.62	0.748	0.464	0.263		

蛍光 X 線 分析

愛媛県内の窯址出土須恵器の分析

(3)

遺跡名	出土地	器種	K	C a	F e	R b	S r	N a	報告No	備考
通音池4号窯跡			0.563	0.127	1.42	0.575	0.352	0.182		
			0.565	0.157	2.22	0.873	0.376	0.187		
			0.598	0.210	1.84	0.791	0.487	0.286		
			0.556	0.214	2.02	0.662	0.451	0.206		
			0.623	0.180	2.09	0.861	0.394	0.183		
			0.513	0.149	1.78	0.706	0.408	0.227		
			0.498	0.163	2.05	0.581	0.402	0.215		
			0.358	0.208	2.34	0.495	0.336	0.177		
			0.672	0.196	1.71	0.921	0.425	0.179		
			0.535	0.174	1.61	0.822	0.402	0.218		
			0.564	0.204	1.79	0.796	0.461	0.277		
			0.613	0.174	1.56	0.835	0.455	0.276		
			0.634	0.210	1.91	0.756	0.480	0.280		
			0.625	0.238	1.81	0.833	0.491	0.307		
			0.614	0.255	1.86	0.865	0.501	0.280		
			0.526	0.192	1.92	0.681	0.413	0.247		
			0.603	0.210	2.09	0.895	0.408	0.189		
			0.600	0.114	1.18	0.739	0.468	0.232		
桟橋下池3号窯址		平 盆	0.602	0.119	1.97	0.726	0.308	0.233	平P45-257	
		平 盆	0.671	0.161	2.35	0.808	0.380	0.279	平P45-266	
		坏 身	0.654	0.161	2.26	0.810	0.383	0.273		
		坏 身	0.526	0.116	2.05	0.648	0.317	0.210		
		坏 身	0.695	0.166	2.37	0.820	0.380	0.272	平P45-270	
		坏 身	0.616	0.135	1.55	0.807	0.373	0.266		
		盖	0.523	0.118	1.64	0.719	0.317	0.161		
		盖	0.595	0.125	1.40	0.792	0.348	0.223		
		盖	0.504	0.118	1.23	0.703	0.350	0.208		
		盖	0.506	0.132	1.41	0.802	0.350	0.221		
		盖	0.578	0.130	1.34	0.808	0.340	0.199		
		盖	0.503	0.118	1.26	0.704	0.349	0.207		
		盖	0.616	0.110	1.54	0.791	0.347	0.224		
		蓋	0.596	0.106	1.81	0.758	0.336	0.224		
		蓋	0.620	0.120	1.73	0.785	0.337	0.242		
		蓋	0.522	0.082	1.27	0.666	0.299	0.188		
		蓋	0.662	0.113	1.79	0.815	0.346	0.263		
		蓋	0.587	0.123	1.20	0.833	0.353	0.214		
		蓋	0.639	0.129	2.42	0.737	0.333	0.230		
		蓋	0.654	0.106	1.73	0.821	0.339	0.243		

(4)

愛媛県内の窯址出土須恵器の分析

遺跡名	出土地	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	報告No	備考
浜谷1号窯址	环 壶	0.599	0.121	2.72	0.715	0.313	0.222			
	高 壺	0.480	0.164	3.61	0.599	0.314	0.149			
	壺	0.544	0.141	2.55	0.791	0.325	0.151			
	壺	0.583	0.095	2.22	0.803	0.296	0.158			
	壺	0.432	0.178	2.33	0.665	0.333	0.137			
	壺	0.529	0.181	2.32	0.746	0.368	0.180			
	壺	0.554	0.130	2.18	0.776	0.323	0.172			
	壺	0.531	0.095	1.66	0.815	0.299	0.160			
	壺	0.511	0.125	1.95	0.683	0.303	0.120			
	壺	0.528	0.160	2.30	0.649	0.354	0.177			
	壺	0.603	0.124	2.46	0.800	0.321	0.145			
	壺	0.554	0.079	1.70	0.813	0.288	0.161			
	壺	0.568	0.133	2.32	0.816	0.323	0.168			
	壺	0.420	0.096	3.20	0.357	0.249	0.100			
	壺	0.658	0.156	1.55	0.971	0.436	0.253			
	壺	0.656	0.147	2.51	0.816	0.345	0.253			
	壺	0.382	0.162	3.66	0.482	0.268	0.136			
	壺	0.597	0.132	2.75	0.712	0.341	0.174			
	壺	0.538	0.131	3.03	0.677	0.323	0.180			
	壺	0.619	0.159	2.67	0.741	0.366	0.190			
恵社谷1号窯址	不 壺	0.534	0.101	1.73	0.784	0.318	0.145			
	环 壺	0.618	0.096	3.42	0.775	0.270	0.161	JBH-219		
	环 壺	0.615	0.094	2.74	0.805	0.266	0.160			
	环 壺	0.637	0.131	2.16	0.832	0.334	0.171			
	环 壺	0.558	0.098	1.91	0.815	0.294	0.166			
	环 壺	0.629	0.095	1.85	0.862	0.289	0.177			
	环 壺	0.611	0.117	2.90	0.773	0.290	0.136			
	环 壺	0.512	0.096	1.02	0.709	0.285	0.165			
	不 壺	0.582	0.106	1.47	0.836	0.330	0.206			
	环 壺	0.602	0.179	1.59	0.812	0.394	0.223			
	壺?	0.474	0.090	1.23	0.686	0.272	0.110			
	壺	0.528	0.140	2.06	0.766	0.314	0.112			
	壺	0.563	0.131	1.55	0.766	0.311	0.180			
	壺	0.637	0.150	1.47	0.822	0.361	0.161			
	壺	0.519	0.099	1.70	0.723	0.300	0.158			
	壺	0.646	0.120	1.96	0.907	0.342	0.187			
	壺	0.558	0.103	2.19	0.699	0.327	0.178			
	壺	0.524	0.107	2.21	0.704	0.356	0.156			
	壺	0.540	0.102	2.03	0.789	0.296	0.158			
	壺	0.657	0.108	2.24	0.810	0.319	0.115			

蛍光 X 線 分 析

(4)

愛媛県内の廃址出土須恵器の分析

遺跡名	出土地	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	報告No	備考
駄場塙ヶ懐1号 廃址	南华内	平壺	0.638	0.098	2.06	0.780	0.236	0.226		
	南体内	無高台环	0.639	0.097	2.04	0.813	0.332	0.258		
	南体内	坪壺	0.583	0.101	1.95	0.732	0.311	0.150		
	灰壺	壺	0.608	0.063	1.86	0.794	0.327	0.239		
	灰壺	坪壺	0.650	0.122	1.86	0.880	0.259	0.208		
	灰壺	坪壺	0.639	0.116	1.66	0.812	0.367	0.281		
	均壺	坪壺	0.617	0.080	2.06	0.778	0.312	0.256		
	灰壺	無高台环	0.648	0.165	1.80	0.821	0.383	0.218	本刊P25-28	
	灰壺	無高台环	0.646	0.095	2.57	0.767	0.294	0.225	本刊P25-26	
	灰壺	黑高台环	0.672	0.114	1.74	0.822	0.343	0.218	本刊P25-106	
	灰壺	有高台环	0.664	0.128	1.66	0.799	0.363	0.273	本刊P27-117	
	灰壺	灰壺	0.584	0.063	2.10	0.587	0.236	0.118	本刊P28-127	
	灰壺	高台	0.599	0.136	1.96	0.804	0.362	0.170		
	灰壺	平壺	0.610	0.107	2.01	0.816	0.329	0.222	本刊P29-26	
	灰壺	燒壺	0.617	0.099	2.02	0.724	0.301	0.146	本刊P31-172	
	灰壺	壺	0.643	0.065	1.88	0.656	0.237	0.200	本刊P33-179	
	灰壺	鉢	0.693	0.080	2.10	0.626	0.274	0.137		
	灰壺	酒	0.561	0.061	2.43	0.458	0.209	0.132	本刊P27-119	
	灰壺	高壺	0.627	0.123	2.40	0.812	0.340	0.229	本刊P29-161	
駄場塙ヶ懐2号 廃址	年金	平壺	0.626	0.099	2.30	0.803	0.294	0.182		
	年金	年金	0.601	0.087	2.85	0.819	0.268	0.170		
	年金	無高台环	0.632	0.108	2.25	0.818	0.308	0.183		
	年金	無高台环	0.621	0.095	2.23	0.881	0.318	0.171		
	年金	無高台环	0.547	0.066	3.06	0.645	0.220	0.135		
	年金	無高台环	0.580	0.061	2.00	0.702	0.268	0.219		
	年金	有高台环	0.563	0.080	2.85	0.877	0.232	0.130	本刊P39-188	
	年金	無高台环	0.627	0.079	2.66	0.839	0.279	0.175		
	壺	壺	0.644	0.085	2.12	0.882	0.299	0.176		
	壺	壺	0.612	0.104	2.21	0.872	0.299	0.187		
	壺	壺	0.630	0.077	2.18	0.849	0.288	0.169		
	壺	壺	0.633	0.104	2.30	0.871	0.321	0.195		
	壺	壺	0.630	0.060	1.21	0.775	0.288	0.266		
	壺	壺	0.653	0.116	2.46	0.843	0.303	0.188		
	壺	壺	0.588	0.072	4.47	0.620	0.205	0.172		
	壺	壺	0.540	0.069	3.06	0.608	0.209	0.153		
	壺	壺	0.584	0.091	2.76	0.777	0.257	0.167		
	壺	壺	0.642	0.089	1.83	0.824	0.301	0.235		
	壺	壺	0.574	0.066	2.81	0.719	0.243	0.145		

第11章 調査の成果と課題

本書では、小野川上流から中流までにある6遺跡8調査について報告を行った。ここでは、上流域と中流域に分けまとめをする。

(1) 小野川上流域の調査

小野・平井地区にある駄場姫ヶ懐窯址、北梅本惡社谷遺跡、上刈屋遺跡では、古墳時代後半期の集落・古墳・窯址を確認した。

1) 古墳時代後期の集落

上刈屋遺跡2次調査では、掘立柱建物が2棟検出されている。建物は切り合い関係にあり、層位と出土物より6世紀以降に建て替えられたことが分かった。掘立1は、規模が2×4間、面積30.42m²と大きく、住居として機能していたものと考えられる。近隣の平井遺跡では7世紀の集落遺構が検出されており、本例よりやや新しいものになる。平井遺跡の集落が継続されていたことがうかがえる。

2) 古墳時代後期の墳墓

上刈屋遺跡1次調査では、小型の石室が1基検出されている。時期は、出土物より6世紀初頭とみられる。小野・平井地区には、古墳が5世紀以降に造営され、6世紀代には群集墳を形成し、その多くは北にある丘陵部に立地している。上刈屋遺跡は、丘陵より低い扇状地上に立地する古墳であり、小野・平井地区的古墳群は、丘陵だけでなく低地の扇状地にまで広く展開していることが明らかとなった。

3) 古墳時代後期の窯址

小野・平井地区の丘陵には、古墳群と窯址群が存在している。本書では、窯址1基の調査報告と、踏査による表探資料を掲載した。

駄場姫ヶ懐窯址は7世紀後半に比定されるもので、松山平野における須恵器研究の基礎資料として評価されるものである。さらに、地域在中者による表探資料は、小野谷一帯が7世紀から8世紀までの間、松山平野において主要な窯址地域であったことを裏付けるものとなった。ただし、表探資料では、窯址の認定は難しく、確認調査による検証を必要としている。

なお、これまでに判明している小野・平井地区的窯址分布と一覧を282ページに付した。

(2) 小野川中流域の調査

米住台地の周縁部にあたる閑遺跡(1・2次)、片廻り遺跡(2次)、今在家遺跡では、主に縄文時代晚期から古代までの遺構と遺物を確認した。

1) 縄文時代晚期

片廻り遺跡2次調査では、晩期の土器と石器が出土している。米住台地の南西部では縄文

時代の資料は稀で、遺構や遺物が増加するのは弥生時代前期前半（久米高畠遺跡5次調査）以降である。よって、本資料は、来住台地の出現期の集落変遷を考える上で貴重な資料といえる。また、松山平野における晩期後半の土器や石器について、その様相が知れる数少ない資料でもある。

2) 弥生時代後期

今在家遺跡SK2では、後期後葉の上器と石器が良好な状況で出土している。土器では、完形品に近いものが多く、さらには特異な長頸壺も出土しているため、SK2は単なる廃棄の場ではなく、特別な意図をもつ遺構と考えられる。

3) 古墳時代

開遺跡1・2次調査では、5世紀末から6世紀後半までの堅穴式住居址が検出された。この地域では、集落が継続的に存在していたことを推測させる。来住台地では、北側部分や南西部に同時期の住居址が検出されており、6世紀代には、来住台地一帯に複数の集落が存在していたと考えられる。

4) 古代

南久米片廻り遺跡2次調査では、7～8世紀代の遺物が出土している。来住台地一帯は、同時期の遺構が検出されるが、遺物は少ない。本資料は来住台地の集落分析の一つの基礎資料になるものと思われる。

(3) 小野川上流窯址

報告書作成に際しては、小野川上流域における窯址の確認調査を行った。調査の結果、小野川上流域では、少なくとも13基の窯址を確認した。最も古い窯址は6世紀後半の枝栄下池1・2号窯で、新しいものでは8世紀後半の窯址を確認した。

さて、三辻利一氏の自然科学分析では、小野川上流域と平野南部にある砥部地域の生産品には胎上に違いが求められることが明らかになった。さらには、来住台地上の久米高畠遺跡出土品が小野川上流域の生産品であることが指摘された。これにより、須恵器研究における生産地と供給地との関係は一部ではあるが明らかになってきた。

なお、平成8年11月、再度現地踏査を行った。調査は長井数秋氏と現地におもむき、主に枝栄下池1・2号窯の確認を目的とした。踏査での採集品については、追加資料として276～282ページに掲載している。

本書では、松山平野の主要な窯址の報告と、来住台地周辺部の集落事態を一部明らかにすることができた。特に、駄場蛇ヶ淵窯址の調査は、出土物の整理と継続的な踏査により窯址群の変遷を具体的に明らかにした点で評価できるものである。今後は、小野川の上流域と中流域との関係を追究する調査が必要であろう。

=追加資料=

ここでは、平成8年6月と平成8年11月に採集した遺物について資料提示をおこなう。平成8年6月は、山木健一が中心となり枝栄下池全城にわたり踏査を行い、結果の一部は第3章に掲載している。また、平成8年11月上旬には、長井数秋氏に調査への参加をいただき、栗田・梅木・山本・水口・加島が枝栄下池1・2号窯の位置について確認をした。

なお、長井氏が採集した枝栄下池1・2号窯出土品は、財松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターがゆずり受けた。同資料については、時間の関係より本書では未掲載となつたが、平成9年の報告書にて提示したいと考えている。

以下、悪社谷2号窯、枝栄下池3号窯、枝栄下池4号窯の採集品について略記する。本文と観察表は加島なおみが記述した。

悪社谷2号窯

所 在 松山市北梅木町

立 地 悪社川上流の小間折谷東斜面

海拔140m

遺 構 未確認

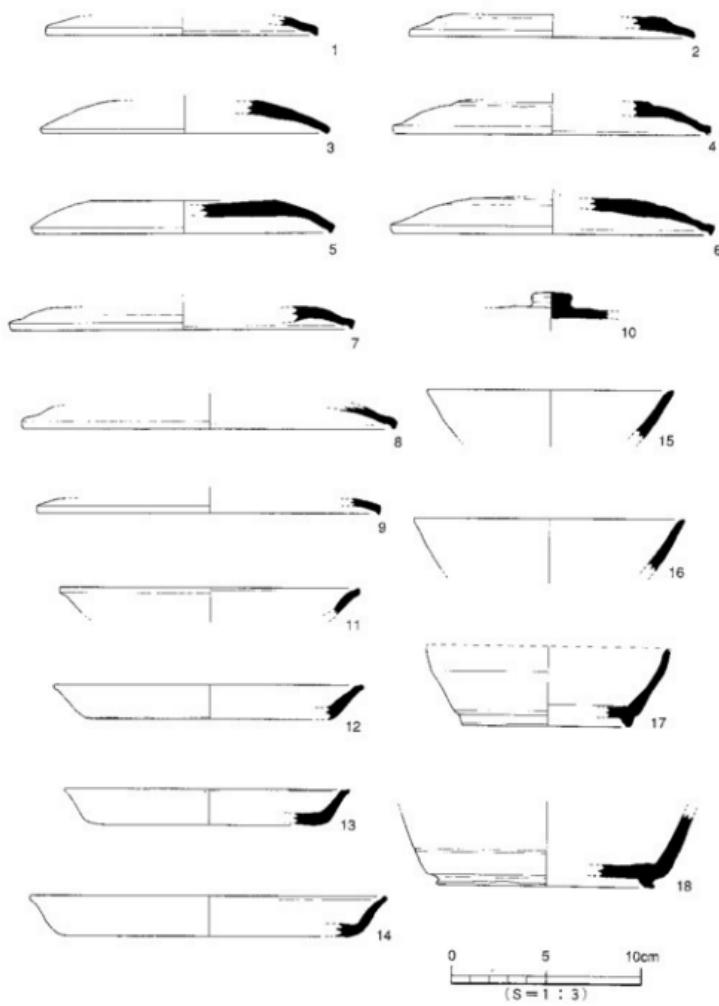
遺 物 第172・173図1~28 採集したのは蓋・壺・皿である。蓋は口径15~20cm代のもので、かえりはない。口縁端を下方に屈曲させているが、その尖り方や長短はまちまちである。皿は口径15~19cm代のもので、底部より外方に開く。口縁端は上方に短く屈曲させたものと、沈線を1条施したものがある。有高台壺は口径にばらつきがある。無高台壺の口径は15cm代にある。内底面から口縁にかけてのたち上がり部分ははっきりと境がつく。これは8世紀代の壺の特徴と言える。

枝栄下池3号窯

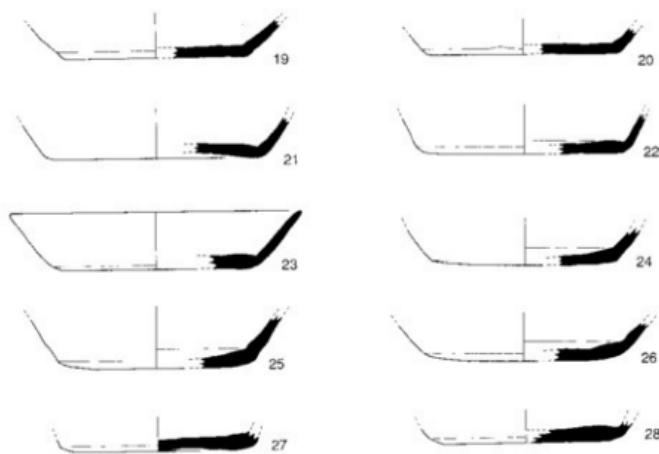
ここでは第2章第32図で掲載した採集品と、同じ窯から後に表採されたものを第174図(29~33)に追加報告する。29は肩部が「く」の字に屈曲する短頸壺。32は口縁が外反する広口壺。33は口縁が開くタイプのもので体部は叩き痕をナデ消そうとしている。30の壺は、内面に沈線を1条施す。31は皿の口縁と考えられる。

枝栄下池4号窯

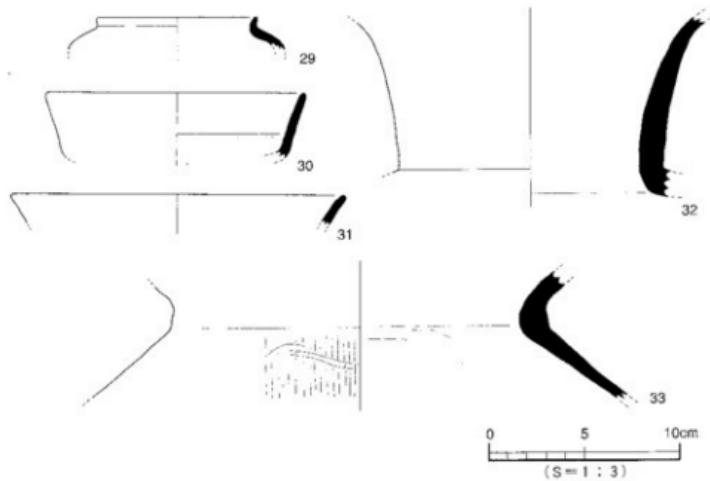
ここでは第2章第33図で掲載した採集品と、同じ窯から後に表採されたものを第175図(34~41)で追加報告する。蓋の口径は18cm代を測る。皿は口縁内縁に沈線を施し、口径21.7cmを測る。壺は有高台の小型のものと、口径12~13cm代の無高台壺がある。いづれも内底面からの立ち上がり部を意識して作っている。41の壺は口縁端を外方に尖らせる。



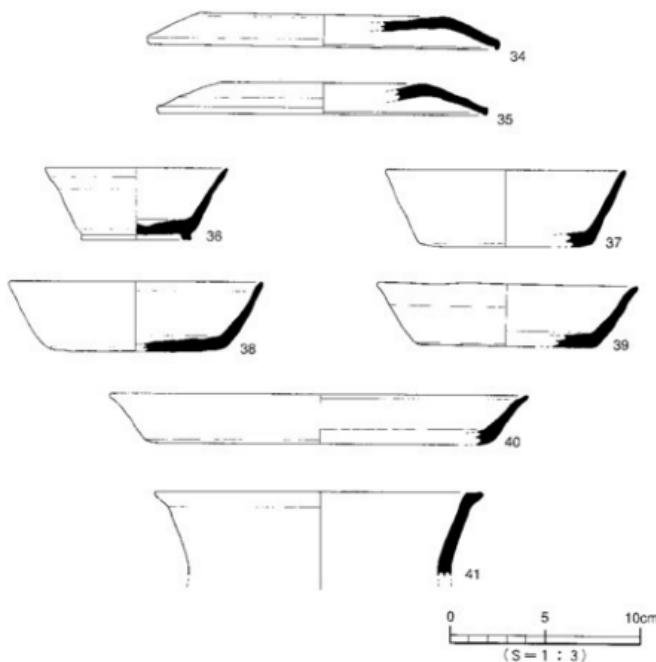
第172図 惠社谷2号窯址採集遺物 (1)



第173図 恵社谷2号窯址採集遺物（2）



第174図 枝条下池3号窯址採集遺物



第175図 枝条下池4号窯址探集遺物

遺物観察表 (作成者: 加島なおみ)

(1) 遺物観察表の各記載については、以下である。

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 : 土器の部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 : 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。()中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 砂・長 (1~4)、多「1~4 mm大の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

調査の成果と課題

表77 比社谷2号窯址採集遺物観察表 土製品

(1)

番号	基種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 燒 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
1	坏壊	口径(14.2) 残高 1.0	口縁つまみ下方に屈曲 させる。	ヨコナダ	ヨコナデ	灰色 灰色	石・長(1~2) ○		
2	坏壊	口径(14.8) 残高 1.15	天井部との境に絞がつく。	ヨコナダ	ヨコナダ	茶青灰色 暗青灰色	石・長(1~4) ○		
3	坏壊	口径(14.9) 残高 1.8	口縁つまみ出し弱い。	ヨコナダ	ヨコナダ (自然灰釉)	灰色 淡灰黄色	石・長(1~2) ○	焼けりずむ	
4	坏壊	口径(16.6) 残高 1.9	口縁端近く下方に屈曲。	ヨコナダ ヨコナダ	ヨコナダ	暗灰黑色 黑色、绿色 青灰色	長・6(1~4) ○	焼けりずむ	
5	坏壊	口径(15.2) 残高 1.75	口縁端つまみ出し弱い。	ナダ	ヨコナダ	灰色 灰色	長・石(1~2) ○		
6	坏壊	口径(16.3) 残高 1.8	天井部との境に絞がつく。	ヨコナダ ヨコナダ	ヨコナダ	灰色 灰色	長・石(1~2) ○		
7	坏壊	口径(17.8) 残高 1.2	口縁端近く下方に屈曲。	ヨコナダ (自然灰釉)	ヨコナダ	青褐色・灰褐色 灰褐色・绿色	長・石(1) ○		
8	坏壊	口径(19.4) 残高 2.2	口縁端近く下方に屈曲。	ヨコナダ	ヨコナダ	淡灰黄色 淡灰黄色	石・長(1) ○		
9	坏壊	口径(17.9) 残高 0.8	口縁端つまみ出し弱い。	ヨコナダ	ヨコナダ	乳灰黄色 淡灰色	石・長(1) ○		
10	坏壊	口径2.1 つまみ出0.8	上面わずかに突出。	ヨコナダ	ナダ	淡灰黄色 灰色	石・長(1) ○		
11	皿	口径(15.6) 残高 1.05	口縁外反。溝筋上方へ短く屈曲。	ヨコナダ	ヨコナダ	灰褐色 灰褐色	石・長 ○		
12	皿	口径(16.1) 底径(15.5) 残高 1.8	口縁開く。端先彎り内側 溝筋1本。	ヨコナダ ナダ	ヨコナダ	灰色 灰色	石・長 ○		
13	皿	口径(14.9) 底径(12.8) 残高 1.9	口縁開く。溝筋先内側 溝筋1本。	ヨコナダ ナダ	ヨコナダ	灰色 灰色	石・長(1~2) ○		
14	皿	口径(18.5) 底径(18.8) 残高 2.15	口縁外反。端丸くおさめ 内側沈線1本。	ヨコナダ	ヨコナダ	暗灰色 青褐色・暗灰色	長・石(1~2) ○		
15	杯	口径(12.9) 残高 2.6	外に凹き、端先細る。	ヨコナダ	ヨコナダ	灰色 灰色	(i・長(1) ○		
16	杯	口径(12.2) 残高 2.8	外に凹き、端先細る。	ヨコナダ	ヨコナダ	黒灰色 黒灰色	長(1) ○		
17	碗的	底径(8.8) 残高 4.2	高台、底部外よりに付す。 口縁下部で内汚。	ヨコナダ	ヨコナダ	淡青灰色 淡灰色	石・長(1) ○		

悪社谷2号窯址採集遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
18	瓶	底径(11.4) 残高 4.0	口縁外方に開く。外側に沈 線1条。両合底。	②ヨコナデ ④四軒ヘラ切り	ヨコナデ	淡灰色 灰色	石・長(1) ◎		
19	壺	底径(9.4) 残高 1.95	平底。口縁外方に開く。	②ヨコナデ ④四軒ヘラ切り	ヨコナデ	乳灰黄色 乳灰黄色	石・長(1) ◎		
20	壺	底径(10.0) 残高 1.35	平底。口縁外方に開く。	②ヨコナデ ④四軒ヘラ切り	ヨコナデ	淡灰黄色 淡灰黄色	石・長(1) ◎		
21	壺	底径(10.8) 残高 2.1	平底。口縁外方に開く。	②ヨコナデ ④四軒ヘラ切り	ヨコナデ	灰黄色 灰色	石・長(1) ◎		
22	壺	底径(10.4) 残高 2.1	平底。口縁外方に開く。	②ヨコナデ ④四軒ヘラ切り	ヨコナデ	灰黑色 青灰色、墨灰色 灰黑色	石・長(1~2) ◎		
23	壺	口径(15.2) 器高 3.03 底径(9.8)	平底。口縁外方に開き、縫 部丸くおさめる。	②ヨコナデ ④四軒ヘラ切り	ヨコナデ	灰色 灰色	石・長(1~3) ◎	火だすき	
24	不	底径(9.6) 残高 1.9	平底。口縁外方に開く。	②ヨコナデ ④四軒ヘラ切り+ナデ	ヨコナデ	綠灰色 淡灰色	石・長(1) ◎	火だすき	
25	壺	底径(10.4) 残高 2.65	平底。やや丸底有。 内底立ち上がりに段。	②ヨコナデ ④ナデ	ヨコナデ	褐灰色、淡褐色 淡灰褐色	石・長(1~2) ◎	丸底にヘラ 切手	
26	壺	底径(10.4) 残高 2.0	平底。やや丸底有。 内底立ち上がりに段。	②ヨコナデ ④四軒ヘラ切り	ヨコナデ	淡灰褐色 灰褐色	石・長(1~2) ◎		
27	壺	底径(10.2) 残高 1.0	平底。	④四軒ヘラ切り →縫ナタデ	ヨコナデ	淡灰褐色 灰褐色	石・長 ◎		
28	壺	底径(8.6) 残高 1.0	平底。	④四軒ヘラ切り	ヨコナデ	灰色 灰色	石・長 ◎		

表78 枝葉下池3号窯址採集遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
29	甕	口径(8.3)	口縁幅く、肩部は円錐。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳灰色 乳灰色	石・長(1) ◎		
30	壺	口径(13.4)	口縁幅丸くおさめ、当面に 沈線1条。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡灰褐色 淡灰褐色	石・長 ◎		
31	皿	口径(17.4)	口縁外方に開き、底部は丸 くおさめる。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳灰褐色 淡灰褐色	石・長 ◎		
32	甌	底径(14.0)	口縁部まっすぐに伸び、口 縁外反する。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 乳黄褐色	石・長(1) ◎		
33	甌	底径(20.0)	口縁部外反。ナタ削ぎみ。	①②ヨコナデ ③ タタキ→ナデ	②③ヨコナデ ③ タタキ→ナデ	灰色 乳黄褐色	石・長(1) ◎		

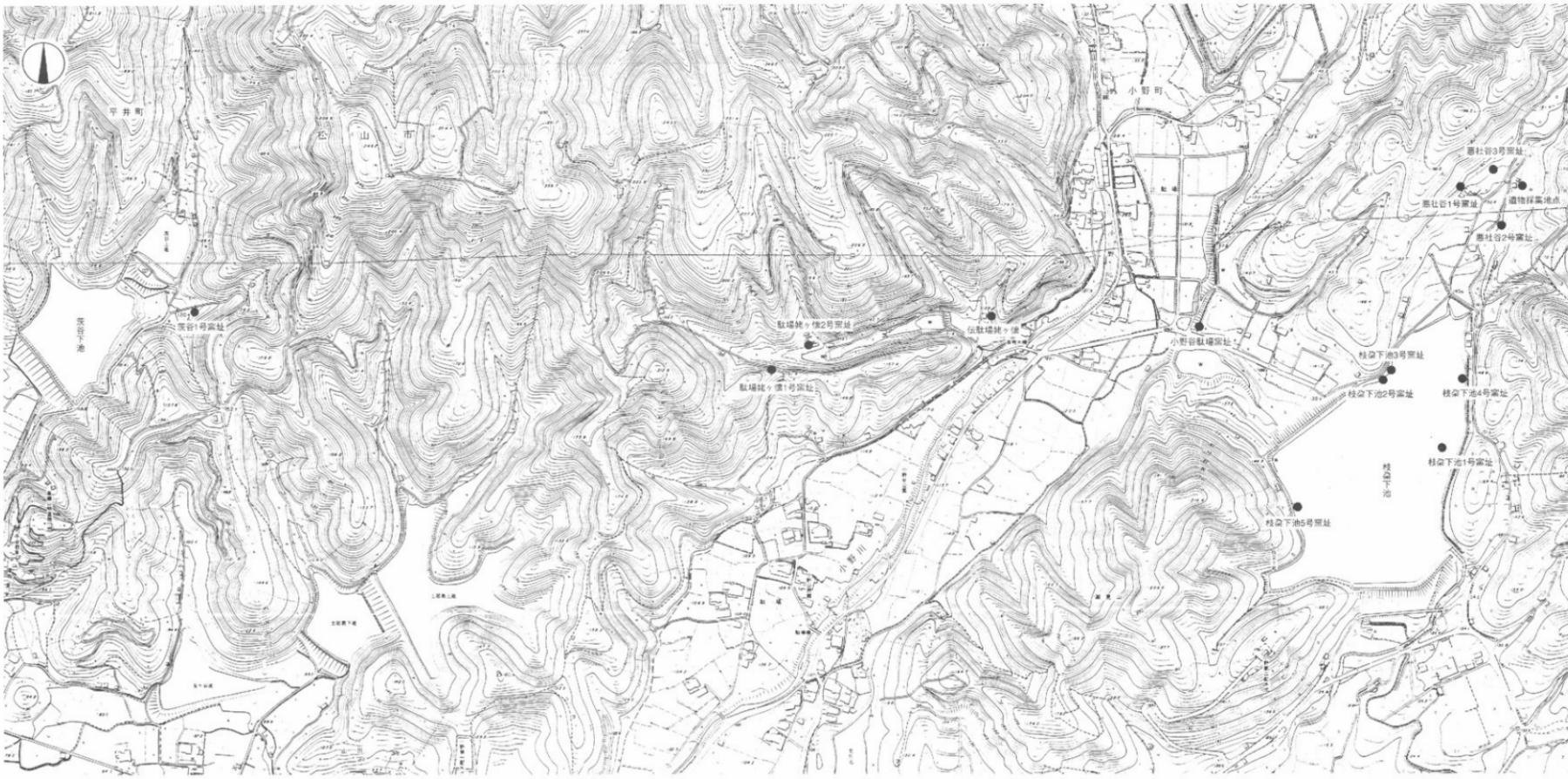
調査の成果と課題

表79 枝条下池4号窯址採集遺物觀察表 土製品

番号	基種	法量(cm)	形態・施文	模 繁		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
34	平底	口径(18.2)	口縁下方に短く凹曲。 ④ヨコナダ	ナダ	ナダ	褐色・深褐色 乳白色	石・長(1) ○	焼きひずむ	
35	平底	口径(17.2)	口縁下方に短く凹曲。 ヨコナダ	ヨコナダ	ヨコナダ	緑灰色 青灰色	石・長(1) ○	焼きひずむ	
36	瓦形 器蓋	口径(9.5) 器高 2.8 高台(3.7)	口縁下を強く弧で、口縁を 強く尖らす。 内底部に凹線をもたらす。	ヨコナダ ④試輪ヘラ切り	ヨコナダ	灰褐色 灰褐色	石・長 ○		
37	坪	口径(12.5) 器高 4.1 底径(9.1)	口縁開く。端部は外側より 強く弧で外反する。	ヨコナダ ④ナダ	ヨコナダ	白灰色・灰色 灰褐色・灰色	石・長 ○	内面に大だ き	
38	坪	口径(13.2) 器高 3.7 底径(9.2)	口縁開く。端部は内面を強 く弧で外反することで肥厚。	ヨコナダ ④試輪ヘラ切りナダ	ヨコナダ	白色・灰色 白灰色・灰褐色 灰褐色	石・長(1~4) ○		
39	坪	口径(13.5) 器高 3.3 底径(9.0)	口縁開く。端部は外側より 強く弧で外反する。	ヨコナダ ④ヨコナダ ④試輪ヘラ切りナダ	ヨコナダ	浅褐色・深褐色 深褐色・深褐色	石・長(1~4) ○		
40	皿	口径(21.7) 器高 2.6 底径(17.2)	口縁開く。端部は内面強く 弧で、段がつく。	ヨコナダ	ヨコナダ	灰色 白灰色	石・長(1) ○		
41	盃	口径(17.0) 器高 4.1	口縁上端は圓をもつ。外縁 つまりし尖がる。	ヨコナダ	ヨコナダ	白色 灰褐色	(1)・長(1) ○		

表80 小野・平井地区の窯址一覧製品

遺跡名	種類	施設	遺物	時期	調査	備考
西社谷1号	窯址	窯体	窓壁・須恵器	SC前半	踏査	遺物多量
西社谷2号	窯址	窯体	窓壁・須恵器	SC前半	踏査	遺物多量
西社谷3号	窯址	窯体	不 明	踏査		窓体を踏で損傷する。
黒社谷	遺物発掘地		窓壁・須恵器	(SC前半)	踏査	遺物数点
枝条下池1号	窯址	窯体	窓壁	6C後半	踏査	遺物少量。池のなか、長井数株氏による調査。
枝条下池2号	窯址	窯体	窓壁・須恵器	6C後半	踏査	同上。
枝条下池3号	窯址	窓壁	窓壁・須恵器	8C前半	踏査	窓体を踏むと露呈する。
枝条下池4号	窯址	窯体	窓壁・須恵器	8C前半	踏査	同上。
枝条下池5号	窯址	窓壁	窓壁・須恵器	8C後半	踏査	窓体を踏むと露呈する。池のなか。
小野古私場	窯址				踏査	踏査
(伝)駄場鍵ヶ瀬	伝承地				踏査	
駄場鍵ヶ瀬1号	窯址	窓壁・須恵器・瓦片	窓壁・須恵器	7C後半	本格調査	保存、野外表示
駄場鍵ヶ瀬2号	窯址		窓壁・須恵器	8C初頭	踏査	一部が遺存
美谷1号	窯址		窓壁・須恵器	7C初頭～晩期	踏査	遺物多数



第176図 小野・平井地区の窯址分布図 ($S = 1 : 5,000$)

抄 錄

ふりがな	おのがわりゅういきのいせき						
書名	小野川流域の遺跡						
副書名	駿場城ケ墳墓址・北梅木悪社谷・上戸谷1次・2次・闇1次・2次・南久米片通り2次・今在家						
卷次							
シリーズ名	松山市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第57集						
編著者名	栗田茂敏・松村 審・梅木謙一・宮内慎一・和原浩二・山本健一・加島なおみ・三辻利一						
編集機関	財団法人 松山市生涯学習振興財團裡藏文化財センター						
所在地	〒791 松山市南東院町乙67-6 TEL089-923-6363						
発行年月日	西暦1996年12月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北緯	東緯	調査期間	調査面積(m ²)	調査範囲
だくとうせきのことう 駿場城ケ墳墓址	そやましさいたうめとしま 松山市北梅木町	33°49'00"	132°50'37"	19811125~ 19811228	70		学術
さとうじもとあしきだ 北梅木悪社谷	そやましさいたうめとしま 松山市北梅木町	33°49'00"	132°51'37"	19940530~ 19940630	900		農道整備
かみくわや 上戸谷1次	まつやましきらいまち 松山市平井町	33°48'22"	132°50'19"	19901205~ 1990304	396		宅地造成
かみくわや 上戸谷1次	まつやましきらいまち 松山市平井町	33°48'22"	132°50'19"	19940105~ 19940228	492		宅地造成
ひとき 闇1次	まやましみなんじまち 松山市南土居町	33°47'49"	132°48'32"	19890106~ 19890307	869		宅地造成
ひとき 闇2次	まやましみなんじまち 松山市南土居町	33°47'45"	132°50'25"	19931101~ 19931227	498.10		宅地造成
みづくめのむかひ 南久米片通り2次	まやましみなんじまち 松山市南久米町	33°48'35"	132°47'25"	19890206~ 19890402	901		宅地造成
いまきい 今在家	まやましふいきいまち 松山市今在家町	33°48'18"	132°47'47"	19901103~ 19901228	2,016		農道整備
所収遺跡名	種別	土な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
駿場城ケ墳墓址	窓 墓	古 代	廻塚	須恵器	7世紀の須恵器窓		
北梅木悪社谷	集 落	古 現代	旧地形(谷間)	須恵器、石錐			
上戸谷1次	集 落	弥生 古墳	石室、溝	弥生土器、土師器、須恵器	小石室		
上戸谷1次	集 落	弥生 古墳	掘立柱建物址、土坑、溝、柱穴	上師器、須恵器			
闇 1次	集 落	古 墳	堅穴式住居址、掘立柱建物址、土坑、溝	弥生土器、土師器、須恵器、石庵丁	古墳時代住居の変遷		
闇 2次	集 落	古 墳	堅穴式住居址、掘立柱建物址、土坑、溝	弥生土器、上師器、須恵器			
南久米片通り2次	集 落	縄 文 佐世	堅穴式住居址、掘立柱建物址、土坑、溝	縄文土器、弥生土器、土印器、須恵器、陶器器、石器	縄文晚期土器		
今 在 家	集 落	弥生 古	堅穴式住居址、土坑、溝	弥生土器、石室、須恵器、石鏡	弥生後期土器		

松山市文化財調査報告書 第57集

小野川流域の遺跡
－本文編－

平成8年12月25日 発行

編集 松山市教育委員会

〒790 松山市二番町4丁目7-2
TEL(089)948-6605

発行 財団法人 松山市生涯学習振興財团
埋蔵文化財センター

〒791 松山市南齋院町乙67番地6
TEL(089)923-6363

印刷 原印刷株式会社
〒791 松山市山越4丁目8-15
TEL(089)924-8823
